

42309

教科書文庫

4
810
42-1933
20000 54743

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

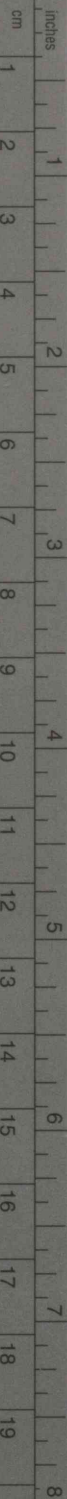


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
Tall  
資料室

日本女子讀本  
改行第一版  
卷八



資料室

325.9

Tall

文部省檢定

昭和八年九月二日 高等女子學校國語科用

文學博士 高木武編

日本女子讀本

改訂  
第一版

東京 富山房版



平業の東下り 尾形光琳筆



日本女子讀本卷八

目次

一	女性と文學的教養	本間久雄	一
二	銀の猫	上田秋成	三
三	熊野落	(太平記)	三
四	朝日の前(詩)	與謝野晶子	六
五	詩を読む人の常識	川路柳虹	三
六	川柳點	金子元臣	四
七	俚諺論	大西祝興	四
八	心の落葉	九條武子	五

目次

一	理智と情操	五
二	許しあふ心	五
三	虚偽の美	五
四	不滅の仕事	五
五	眠に入る時	五
九	婦人と家事經濟的自覺	五
一〇	信乃の生立	五
一一	冬の追想	五
一二	嘉辰令月(朗詠)	五
一三	菅公の左遷	五
一四	アテネの夕日	五

一五	國學者の業績	二〇
一六	をりふしのうつりかはり	一九
一七	古今調と新古今調	二三
	「古今集」より	二三
	「新古今集」より	二五
一八	東下り	二七
一九	隅田川(謠曲)	三三
二〇	野村望東尼	三三
二一	明治維新の精神	四二

# 日本女子讀本 卷八

## 一 女性と文學的教養

本間久雄

現代の女性に要求したいさまざまの文化的教養の中で、特に最も重大なものとして、私の要求したいと思ふものは文學的教養である。

このことを明らかにするには、文學的教養といふことがどういふことであるかをまづ明らかにしなければならぬ。

文學的教養といふのは、文學を味はふことによつて、その人の人格を深め、廣め、高めるといふことである。即ち文學による教養である。さて、それならば文學を味はふことによつて、どうして我

本間久雄  
英文學者、早  
稲田大學教授、  
山形縣の人、  
明治十九年生。

我の人格が深められ、廣められ、高められるか。それは外でもない。文學は、いはゆる「ものあはれ」を感受させ、味得させるからである。

それならば、轉じて「ものあはれ」とはどういふ意味であるか。このことを明らかにすることは、とりもなほさず文學的教養といふことを解説することである。

「ものあはれ」といふことには、さまざまの意味がある。この言葉を用ひる人によつて、また同じ人でも、用ひる場合によつて、ここにさまざまの意味が生じて來る。例へば、兼好法師の「徒然草」の中にも、「あだし野の露消ゆる時なく、鳥邊山の煙立ち去らでのみ住みはつるならひならば、いかにものあはれもなからん。」などいつてゐるこの「ものあはれ」は、人間に死といふことがなければ、悲しみがなからうといふので、普通にいふ悲しみ、または哀傷

あだし野、京都の西郊、嵯峨の奥、愛宕山の麓、こゝに鳥邊山、京都東山の麓、場にあつた火葬

などの意味である。しかし同じ兼好法師が、人間は、あらゆる動物の中で一番長生きをするものであるにかゝらず、いつまでも長生きをしたいといふ欲心が盛んなのは困つたものだといふことを書いて、「ひたすら世を貪る心のみ深く、ものあはれも知らずなりゆくなんあさましき。」といつてゐる場合のは、前とは些か趣が異なつて、單に悲しみといふよりは、よほど複雑なものになつてゐる。文學が「ものあはれ」を知らしめるといふ場合の「ものあはれ」は、いふまでもなく單なる悲しみとか哀傷とかいふ意味のそれではない。それは、つと複雑なものである。

「ものあはれ」に就いては、國學者本居宣長の説くところが最も正しい見解で、今日の我々にも十分傾聴に値するものである。宣長は、まづ「あはれ」といふ言葉の意義から始めて、次のやうにいつてゐる。

「あはれ」といふは云々  
「源氏物語玉の小櫛」卷二に見える

『あはれ』といふは、もと見るもの、聞くもの、觸るゝことに心の感じて出る歎息なげきの聲にて、今の俗言よふことばにも『あゝ』といひ、『はれ』といふこれなり。例へば、月花を見て感じて、『あゝ見事なる花ぢや。』はれ、よい月かな。などといふ。『あはれ』といふは、この『あゝ』と『はれ』との重なりたるものにて、漢文にて嗚呼などある文字を、あゝと讀むこれなり。』

即ち宣長の説明でもわかる通り、『あはれ』といふことは、よきにつけ、あしきにつけ、物に感ずることをいふのであつて、『もの』はただ添へていふこと、例へば、たゞ『いふ』といつてよいところを、『もの』といふ』といつたり、たゞ『かたる』といつてよいところを、『ものがたる』といつたり、その他、ものまうで、『もの見』ものいみなどいふたぐひで、『もの』のあはれを知る』といふことは、宣長の言葉を借りていふと、『何事によれ、感ずべきことにあたりて、感ずべきことゝろを知り

て感ずる』をいふのである。即ち感受性をいきゝと生かせるといふ意味である。宣長は續けていふ、必ず感ずべきことにありても、心うごかず、感ずることなきを、ものあはれ知らずといひ、心なき人とはいふなり。ものわきまへ心ある人は、感ずべきことにはおのづから感ぜではえあらぬに、さもあらぬは、何とも思ひわくかたなくて、必ず感ずべき心知らねばぞかし。』と。

そして宣長に従ふと、文學はこの『もの』のあはれを知らしめるものである。宣長は、『ものがたり』即ち小説の意義を説いて、次のやうにいつてゐるが、これは移してもつて文學全體の意義を説いたものだといふことが出来る。即ちいはく、

『ものがたりは、世の中にあるよきこと、あしきこと、めづらしきこと、をかしきこと、おもしろきこと、あはれなることなどのさまざま、を書きあらはして、つれづれなるほどのもて



あそびにし、または、心のむすぼれて、もの思はしき折などのなぐさめにもし、世の中のあるやうをも心得て、ものあはれを知るものなり。

いかにもおもしろくいつてゐるではないか。即ち善いことでも、悪いことでも、珍しいことでも、をかしいことでも、おもしろいことでも、あはれなことも、何によらず、さまざまの事柄を書きあらはして、世の中の有様、世の中のすがた、世の中のありのままの状態を感じさせ、味ははせて、以て「ものあはれ」を知らせるのが文學だといふのである。

「古今集」の有名な序文にも、  
「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事わざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけていひ出だせるなり。花に啼く鶯、

古今集  
我回第  
探集の和歌和集  
さりのころやうかま  
なそつくりま

水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

といつてあるが、かやうに歌が人の心を感動させるのも、つまり人の心に「ものあはれ」を知る特殊の感情——感受性があるからであるといへるのである。

文學によつて、「ものあはれ」を知るといふことは、だから世の中のあるやう、即ち世の中のさまざまの人間関係を、たゞに表面的だけではなく、底の底まで立入つて、深くしみんと味はふといふことを意味するのである。今日の新しい言葉でいふと、全面的なまたは全圓的な人生味とか、或は全體としての人生の味はひなどいふ意味である。そしてかういふ全體的な味はひを味得

させ、感知させるところにこそ、實に文學の人生にもたらす大きな効果があるのである。

だから、文學を本當に味はつてゐる人、即ち眞に「ものあはれ」を感じてゐる人と、さうでない人とでは、その人の内生活は大變に違つてゐる。

文學を味はつてゐる人は、全體としての人生を見るから、同情心が非常に豊かである。だから、ここに例へば極惡無道の人間があつても、その人は決してそれをすぐさまに極惡無道の人間として取扱はない。どうして、一般の人と同じ人間でありながら、彼ばかりがさういふ極道者になつたかといふ徑路をまづ初に考へる。事實、傑れた文學は、その作者もさういふ同情心の深い、豊かな人であるから、その文學作品にも、おのづからさういふ同情心が満ち溢れてゐるのが常である。

「ものあはれ」を知るといふことは、かういふやうに、決して表面的なものを見ることではなく、底の底まで人間關係を味ははうとするのであるから、人間のよろ／＼の心の影といふものを味得ることが、また文學的教養の非常に重大なところで、これに就いても本居宣長は大變おもしろいことをいつてゐる。それをざつとかいつまんで述べてみると、一體、人間は深く思をめぐらした場合には、右か左かといふやうには、つきりと心の傾向が定まるものではない。むしろ「とやかくと、くだ／＼しく、女々しく、亂れあひて、定まりがたく、さまざま」の影多かるものであつて、この心の影を描いたのが傑れた文學である。随つて文學を本當によく理解するといふことは、ちよつと表面から見ただけではわからないこの心の影を、よく感じ味はふことであるといふのである。

かやうなぐあひで、とにかく文學を本當によく味はつた人、即ち文學的教養のある人と、さうでない人とでは、人生の見方が大變異なつてゐる。文學的教養のない人は、悪人を見ると、その悪いところだけを見るし、善人を見ると、その善いところだけを見る。つまり善玉・悪玉——と、人間をかう二種類に定めてしまふ。それだけその人は單純なのである。文學的教養のある人は、人間が決してそんな單純なものでないことをよく知つてゐる。その人は、表面からは見えない人間の心の影を十分に洞察するのであるから、それだけその人の人格は複雑であり、豊かであり、味はひに富んでゐる。言葉を換へていふと、それだけその人の内生活は豊富で、人格が深く、高く、廣いのである。

蓋しかういふ人格を贏得ることは、人間として幸福であるばかりでなく、また實に必要なことである。人間は何といつても社

會的動物であるから、人間の生存に最も必要なのは協力共同の精神である。かういふ精神を養ふには、上に述べたやうなもの「あはれ」を知り味はふことによつて、人生に對する同情心を鋭くし、深くし、豊かにすることが最も有效な途だからである。

だから、文學を味はふこと——文學的教養を積むことは、苟も文化國の人間としては、いかなる人も、男女を問はず必要なのである。

それならば、特に婦人にとつてその必要な所以はどこにあるか。

それは外でもない。婦人はその本來の性質上、男子に比して一層多くこの「ものあはれ」を感じし得る素質をもつてゐるからである。女の感情は、男のそれが、どちらかといへば粗く、鈍く、かたくななのに比べて、細く、鋭く、柔かであるから、「ものあはれ」を感

ずる能力も一層多いわけである。それにもかゝらず、女性はいまだに男に比して、この「もの」の「あはれ」を感じずる準備——文學的教養が積まれてゐない。たゞ素質があるだけで、その素質を十分に生かし伸ばすことが出来なかつたのだ。だから、今日において、一層多く文學的素質を積むことによつて、「もの」の「あはれ」を知り感ずるその素質を一層生かし伸ばすことに、今日の婦人は留意してほしいのである。當來の社會の基礎の一つとなるべき女性文化の建設といふことも、考へやうによつては、文學的素質を積んだ女性の間からのみ贏得られるはずだからである。

### 二 銀の猫

上田 秋成

文治その年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例のことにて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後

上田秋成  
江戸時代後期の作家、大阪の人、文化六年歿。  
文治八年、鳥羽天皇の御代、鎌倉の大將殿右大將源頼朝。

べ仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず、遅からず、列を亂さず、練出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、畏み奉る人あまたあるに、警衛して、「あな」とだにいはせず、世にいかめしく尊き御有様なり。



上田秋成

返りまをしして、御手輿に召させ給ふほど、さとき御背に見とゞめさせ給ひ、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、いと瘦黒みづきたるに、衣・杖・笠なども乞食者のさましたる、なほ人ならずや思しけん、「あの法師が修行するやう、名をも問へ」と仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、「有難く御目給へり。いづこよりの修行ぞ、

圓位 また西行とも  
號する俗姓  
名は佐藤義清  
歌僧、建久元  
年歿  
賢き人云々 周の文王が太  
公望(呂尙)を  
見出だしてこ  
れを師輔とし  
た故事を指す。

道行哲  
仙洞御所

名をも申せ。といふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、雲水に在あり所  
定めずはべるものにて、名は圓位と申す。といふ。聞し召されて、さ  
ればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物のたぐひならで、賢き人得  
たるためしに、いざなひ歸らん。我が後につきて來れといへ。とて、  
召しつれさせ給へり。

御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがて大殿おほたまご油あまた照  
らしかゝげたり。今日の道行みちゆきづとゐてこ。と仰せ給ふ。法師ほうしまゐれ。  
とて、御座みま近き一間なる所の簀子すいすに召されたり。大將殿見おこせ  
給ひて、昔は藐姑射びやくこせつの山の御宮仕へせし人の、世をはかなきもの  
に思ししみて、身は黒くやつしたれど、月花の譽は、ものの心なき  
あづまんさへ聞知りたるぞ。八百日やっぴつゆく濱の眞砂の中には、玉と  
て拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ。と仰せ給ふ。いと輝かし  
きにぞ、たゞ夢路をたどるやうにはべりて、聞え奉るべきことも

伊勢の海云々 一伊勢の海千  
尋の濱にひろ  
ふとも今は何  
てふかひかあ  
るべき(敦忠、  
後撰集)

はべらず。さとき御眼に見顯されてはべるこそ、いと有難けれ。  
伊勢の海千尋の濱におり立ちならひはべれど、かひある事もう  
ち出ではべらぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもか  
ねてまねばせ給ふとも漏りきき奉る。天の下まつりごち給ふ御  
器物うつはものの大きいなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきを  
さへ思し知りはべる。大空に羽うちつけて飛ぶ鶴たづの聲霜枯の淺  
茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏し。と申す。  
うち笑ませ給ひ、弓取りし人の、もとの心の猛きには、詠む歌も  
直くあからさまにと聞くはまことか。歌はもののふの荒々しき  
心には詠み得まじきものに、宮人たちはさたし給へりとや。軍に  
出でたちて、笛鼓の音、馬のいなゝきはものとも思はぬを、この三  
十餘りの學びには、心の後るゝはいかに。こは畏き御心にも思し  
惑はせ給ふものか。古への代々の帝は、馬に鞍おき、御弓矢取らし

二銀の猫

大風起り云々  
「大風起兮雲飛揚。威加四海。內兮歸兮故郷。安得猛士兮守四方。」漢之高祖の「大風歌」  
烏鵲南に云々  
「月明星希。烏鵲南飛。」魏の曹操の「短歌行」の一節  
染殿  
昔宮中で染物を取扱つた所  
秀郷  
藤原氏。田原藤太と稱し、鎮守府將軍となつた。

て御軍に立たせ給ひし、その御歌を讀み見奉れば、猛く直々しく、調もいと高しとこそ聞きわたりはべれ。いでや歌詠まんとては、ますらを心をとり隠し、あてになよびかにのみ詠みいでまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさとく猛き御心のまゝにうちまねばせ給はんには、今の世の人、誰かは立ちあへ奉らん。三尺の劍を取りて「大風起り雲飛揚す」と歌ひ、槊を横たへて「烏鵲南に」と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじく磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど、谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、いづれの業にも、初よりすぐれたらんは鬼にこそはべらめ」といふ。人々あれ聞き給へ。世は捨て遁るとも、頼もしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそ

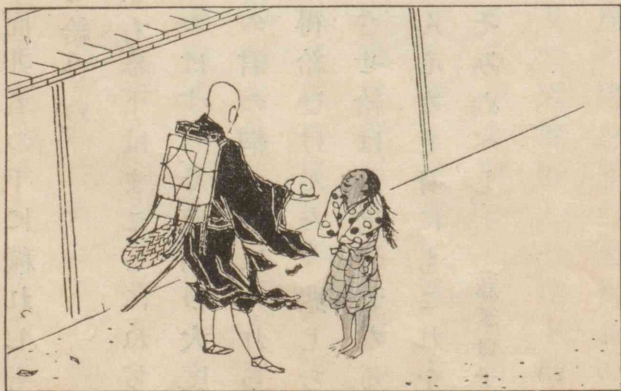
病める士卒云云  
周代の兵學家吳起の故事  
竈を減じて云云  
魏の將軍龐涓の故事

と思ひしみぬることは忘れずてぞあらん。事一言にても教へ承らばや。『こはますく、恐ある御問はせなり。御物語のはては、つはものの道暫しも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にだに物問はせ給ふことの忝さよ。向かひ奉りてはをこがまし、く、何をかは家の傳へなりなどとして聞え奉るべき。まして有難き大宮仕へを否み奉り、親たちのいつくしみをさへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出でたるいたづらもの、弦ひかんすべだに心にもとゞめはべらず。たゞ一言の忘れ難きは、賞を重くし、罰を軽くせよといひしと、任ずるものを辱むれば危しといひしことのみ。病める士卒の疽をすひしは、人の心をよく買ひなすと雖も、まことの情よりも覺えはべらず。竈を減じて人を危きに陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め、天の下をしるべき君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へる

ことの、あやしきまで賢くおはするを、餘所ながら聞き奉るには、この方の御問、ゆるさせ給へ。」とて、額を板敷にすりつけて申す。君笑みほこらせ給ひ、「口とく、心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まらうどは酒飲まざるべし。鹿・猿の中に立交りて、歌詠めといふとも、詠むまじ。たゞ我が前にて遊べ。風冷やかなるにも、飽かず飲み、ものきたなげに食散らす人々は、暖かにこそ。この火取りて法師にまゐらせよ。」とて、白金をもて作れる猫の形したるを取傳へて、「君より賜はず。」とて、前に置きたり。鹿・猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ瘦法師がためには、似つかはしき御賜物ぞ。」とて、三度押戴きて、あした御暇賜はりて立出づるに、御館の人やどりに、誰人の童ならん、くゝり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせん。火埋みして手足暖めよ。」とて、かのきらく

しきものを與へて、顧みもせて立ちぬ。

童、うち驚きて、「これ見給へ。見も知らぬ法師の、見も知らぬ物を賜ひつるは。」とて、青侍に見すれば、目口をばだけ、「かく尊き寶物を誰かは得させん。拾ひやしつる。」といふ。さらに、道のそらにかゝるものやはあるべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。」といふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼出で、しかく、のことなんと申す。「いとあやし。大將殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させけん、いぶかし。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うち笑み給ひ、かの似而非法師、あ



(筆岱雪村小) 猫 の 銀

佛、法、僧  
三寶具の奴

漢高 漢の高祖、劉邦  
曹孟德 魏の武帝、名は操

大塔宮 後醍醐天皇の第三皇子護良親王

心づきもあつても、  
知らぬれぬれしを、  
の秋の夕暮ならずとも、  
うちひそみぬべし。

なづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、我が門の前に棄てゆきつるよ。一度似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ。」とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ、「右幕下はまことにねぢけたる君なり。口に蜜あれど、心には針のおはすらん。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生まれ得給ひけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは。」とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、うちひそみぬべし。

(藤篋冊子)

三 熊野落

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されんために、暫

般若寺 律宗、白雉五年の創建。主上 後醍醐天皇。

露に臥す云々 「あだに散る露のまくらに鳴くなり、床の山風、皇太后、新古今集」

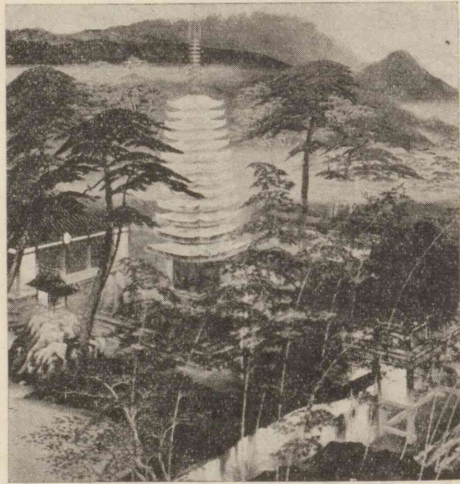
一乗院 奈良興福寺の末寺で、同寺の北にあつた。

あめか下には、  
笠置の山と  
わいよう。

おのれ、  
頼むかげとて、  
をちまひ

なほ、  
神、  
松の下を渡

三 熊野落



(筆光隆條東) 寺 若 般

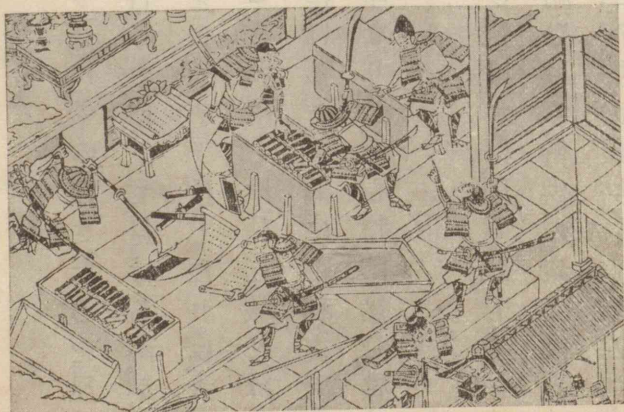
く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上を隠さるべき所なく、日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづことも御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されけるところに、一乗院の候人按察法眼好専、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。



折ふし宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一ふせぎ防  
 ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵既に  
 寺内にうち入りたれば、まぎれて御出であるべき方もなし。さら  
 ばよし自害せんと思し召して、既におしはだ脱がせ給ひたりけ  
 るが、事かなはざらん期に臨んで、腹を切らんことはいと易かる  
 べし。もしやと隠れてみば、やと思し召しかへして、佛殿の方を御  
 覽ずるに、人の讀みかけておきたる大般若の唐櫃三つあり。二つ  
 の櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、  
 蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏  
 させ給ひ、その上に御經をひきかづきて、隱形かんぎやうの呪まじなを御心の中に  
 唱へてぞおはしける。もし搜し出されなば、やがて突立てんと思  
 し召して、氷の如くなる刀を抜いて御腹にさし當て、兵、ここにこ  
 そ」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るもなほ

浅あはかるべし。

さるほどに兵、佛殿に亂れ入りて、  
 佛壇の下、天井の上までも残る所な  
 く搜しけるが、あまりにもとめかね  
 て、「これ體のものこそ怪しけれ。あの  
 大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋し  
 たる櫃二つを開いて御經を取出し、  
 底を覗して見けれどもおはせず。蓋  
 開きたる櫃は見るまでもなしとて、  
 兵皆寺中を出て去りぬ。宮は不思議  
 の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心  
 地して、なほ櫃の中におはしけるが、  
 もしまた兵の立歸り、委しく搜すこともやあらんずらんと御思



大般若の櫃

案あつて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

案の如く、兵どもまた佛殿に立歸り、前に蓋のあきたるを見ざりつるがおぼつかなし。とて、御經を皆うち移して見けるが、からからとうち笑うて、大般若の櫃の中をよくく、搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、または十六善神の擁護による命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖を濕せり。

かくては南都邊の御隱所みかづらもかなひ難ければ、則ち般若寺を御出であつて熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊、赤松律師、則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、かれこれ以上九人なり。宮をはじめ奉

玄奘三藏  
唐代の高僧。  
印度に入り經  
文を持歸つた。

打倒し、おぼつかなし。  
ひて

りて、御供のものまでも、みな柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ざるを先達につくり立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。



田舎山伏

この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、あやしげなる單皮たひ脚巾びんぎ草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣ほうへい宿々の御勤め、おこたらせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修きんじゆを積める先

由良  
今の兵庫縣由良町の東岸にある。

藤代  
今の和歌山縣内海町の字。

和歌  
同縣和歌浦町の海岸。

吹上  
今の和歌山市東南海岸をいふ。

玉津島

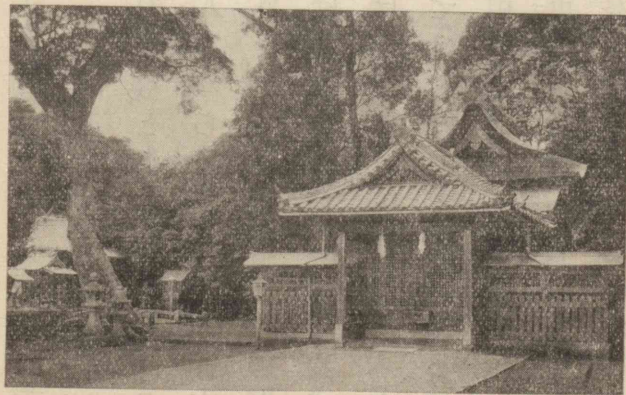
玉津島神社。今、和歌浦町にある。

切目の王子

今、和歌山縣日高郡切目村にある。切目王子社をいふ。

達も見咎むることなかりけり。

由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の楫緒絶え、浦の濱ゆふいく重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれをもよほす時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。



切目の王子

その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤め、感應など

熊野三山

今の和歌山縣東牟婁郡にある熊野本宮・熊野新宮・熊野那智三社。

十津川

熊野川の上流、今の奈良縣吉野郡十津川郷あたりをいふ。

兩所權現

本宮と新宮。

かあらざらんと、神慮も暗に測られたり。夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として暫く御まどろみありける御夢に、びんづら結ひたる童子一人來つて、「熊野三山の間はなわたり候うて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと、御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、頼もしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣をさゝげ、やがて十津川をたづねてぞ分入らせ給ひける。

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕をそばだて、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨ならして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁劍に削り見おろせば

千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身もくたびれはてて、流るゝ汗水の如く、御足は缺損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々もその身鐵石にあらざれば、皆餓疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川へぞ着かせ給ひける。  
(太平記)

四 朝日の前

與謝野晶子

與謝野晶子  
歌人、詩人、  
大阪府の人、  
明治十一年生。

あはれ、日の出、  
山々は酔へる如く、  
みな喜に身をゆすりて、  
黄金と朱の笑まひを交し、  
海といふ海はみな、  
虹よりもまばゆき

黄金と五彩の橋を浮かべて、

「日よ、まづ

ここより過ぎたまへ。」とさし招き、  
さて、日の前にぬかづかんとす。

あはれ、日の出、

萬象は

一瞬にして、奇蹟の如く

すべて變れり。

大寺の屋根に

鳩のむれは羽ばたき、

裏街に眠りし

運河のどす黒き水にも

銀と珊瑚のゆるき波を揚げて、  
早くも動く船あり。  
人、いづこにか  
靜かに怠りて在り得べき。  
静かに怠りて在り得べき、出来ません

あはれ、日の出、  
神々しき日の出、  
われもまた  
かの喬木の如く  
光明赫灼のなかに、  
高く二つの手を開きて、  
新しき日を抱かまし。

(晶子詩篇全集)

新しき、明日の来まし

川路柳虹  
名は誠、詩人、  
東京市の人、  
明治二十一年  
生

五 詩を讀む人の常識

川路柳虹

詩に限らずすべて藝術といふものには、その鑑賞に當つて多  
少の準備が在るものである。いかに初步の人でも、例へば繪を見  
る人なら繪の種類、繪具の名前、それからちよつとした繪の歴史、  
そのくらゐは心得てかゝらねばならない。音楽を聴く人が音譜  
の上り下りくらゐは知つてゐないと困る。と同様に、詩を見る人  
にしても、その程度の知識はもつてゐたいものである。

一口に詩といふが、我々が通常作品としていふ詩とは、主とし  
て韻文殊に抒情詩を指す。そしてこの韻文といふものも廣義に  
見れば、その中には種々な形式のものが包含される。日本の韻文  
といふ點のみからいつても、我々の今いふ詩、それから短歌俳句  
の如き、いづれも廣義の詩、抒情詩である。が、この種の作品の種類

抒情詩  
心の中を、あら  
けす詩

五 詩を讀む人の常識

詩的

美の形容

のみからいはず、抽象的に詩といふ言葉を使ふ場合が多い。例へば哲學と詩とか、科學と詩とか、音樂と詩とかいふやうな一つの概念としての詩といふ言葉は、必ずしも詩の作品——抒情詩を指すのではなく、我々の藝術作品の中に含まれてゐる一つの美を構成する要素としての詩なのである。この種のものはいはゆる詩的といつた風な言葉で誰にも使はれてゐる。詩を見るやうな舞臺だ。とか、詩のやうな繪だ。とか、詩的な人だ。とか、さうした言葉における「詩」とは、即ち詩といふ一つの氣持をいつてゐるので、殆ど「美」といふ言葉と同じに用ひられる。この「詩」なら、すべての藝術における要素として存在していいものである。つまりこの「詩」といふ言葉は、「美しい感情」といふことを指すのである。随つて主觀的なものであり、智的とか意志的とかいつた氣持に對して情緒的なものである。それは理窟でわからずものでなく、人に感じ

させるもの、訴へるもの、随つて暗示的なものといふことにもなる。これが詩といふものの本質である。

かく「詩」は、すべての藝術の要素として必要なものであるが、その「詩」の要素を最も多分にもつべきものは、いはゆる抒情詩である。廣くいふ詩歌である。抒情詩にも「詩」がなかつたなら、それはもう死物である。もつと碎いていへば、抒情詩に感情の美しさがなく、人に訴へる力がなければ、それは詩とはいはれないのである。たゞここに注意すべきは、一口に感情といつても、それは一樣にはいへない。感情といふものにも、やはり粗野なものもあるし、教養されたそれもある。そして高い感情といふものは、常に卑俗な安つばい感情の上にあるものではあるが、詩として望ましい感情は、それがいかなるものであつても、純粹であることである。そのものが粗野であらうとも、教養があらうとも、その底に純粹

な精神を失つてゐては何にもならない。だから、どんな人の作つたものでも、この純粹な精神のあるものほど尊い。古來無學な人の作に往々非常な傑作を見るのは、たゞこの純粹の力がその中にあるためである。この點が、詩を味はふ人にも、また詩を作る人にも最も單純にわかるところである。そこをよく見分けることが、詩を讀む人には特に必要だ。そしてこの純粹な精神といふものは何によつて表れるかといへば、それは詩人の感激の結果だといへる。感じる人——それが詩人だ。感激それが詩を生む根だ。既に感激といふことが詩の基になる以上、詩には感情が要素である以上、これ等のものの表現が、何か一つの表現の形をとることもまた必然である。即ち詩には詩にふさはしい形式がある。ここにおいて散文と韻文の別も起るのである。即ち散文はものの叙述説明に適してゐるが、感情の表現には詩の方が適切であ

る。それはその内容が感激によつて導かれる限り、そこに一つの叙述以上に高調した或ものが必要だからである。人がいい氣持になると、歌ひたくなる、踊りたくなる。すると歌にはおのづから歌ふ調子がつき、踊にはおのづから踊の手振が必要になる。これが節奏、即ちリズムだ。たゞ調子といへば、それは斷片的に高いとか、低いとかいふだけであるが、これが美しい感じを與へるためには、そこに調和がなくてはならない。即ち強弱・高低・抑揚といふものが、その反復される間に何等か一つの纏りがないとをかしい。リズムとは、この調和ある調子をいふ。我々の感情の表現にも一つのリズムがある。それを形にしたものが詩の調子、即ち詩のリズムであつて、このリズムが我々に詩の種々な形式を與へるのである。

それ故、詩にはどこの國でもいろ／＼の形式がある。この形式

は、そのおの／＼の國語の性質によつて異なる。詩の形式の基準は、各國語の綴音の強弱數などによつてそれが變化と統一ともつやうな形になるのである。音の強弱によつてなされる形式は、英詩獨詩、または支那の詩の如きもので、アクセントの鮮明な國語に多い。しかし明確なアクセントをもたない日本語やフランス語の詩は、この方面からする形は發達せず、單に各語の綴音の數からのみ成るのである。和歌の五七五七七の三十一文字、俳句の五七五の十七文字といったやうなものは、皆この音數の基準なのである。

今我々のいふ詩といふものの形は、明治の初年に西洋の詩の形に則<sup>まね</sup>とつてつくり出されたもので、これは和歌や漢詩に對して新體であつたから、當時「新體詩」と呼ばれた。これは形としてはむしろ純粹の日本の詩形の踏襲だといつていい。平安朝の新體

長歌の例

瓜食めば子供あそぼつ  
粟食めば、<sup>アト</sup>アトて、おまはゆ  
いんくより、まをりキム  
まなかひに、もとなかりて

ヤサシなさぬ

山上憶良

大泉

詩には「今様」があり、奈良朝の長詩は「長歌」であつた。降つて催馬樂・盆踊唄その他多くの民謡の調子は、江戸時代まで連綿<sup>つづ</sup>と傳はつてゐるが、これは皆七五五七七七七などを主としてゐる。明治の新體詩の試みは、この形式に新しい内容を盛つてそれを生かしたところにある。

しかしこの七五五七七七七の如く定まつた形でなく、言葉の調子をちやんとした切り方に收めない詩が、明治四十年に出來た。これが自由詩である。當時は一般に口語詩といはれた。それは今までの七五五七七の調子がすべて雅語本位<sup>よみことばほんゐ</sup>であつたものを根本から破壊して、口語の調子にしたからである。随つてこの音數の基準も破れた。これは今の我々の感情が既に七五五七七調の古い言葉で現すことに必然<sup>きつぜん</sup>的な不滿をもつやうになつたからである。この自由詩こそ今の詩の殆どすべてであるといつていい。



この自由詩は一定の形こそないが、しかしたゞの散文であつてはならない。即ち一語々に一定の切り方はないが、言葉の調子、一呼吸の休止はおのづから切り方をこしらへる。我々の會話において、呼吸もつかず五十語も六十語もしやべれず、どこかで自然の休止をこしらへるやうに、この自由詩にあつても、自然な言葉の切り方がおのづから語句に長短をこしらへる。その入亂れた長短の中に、一つの調和が見出だせるやうにする。だから、自由詩の形式は、個人々々の形式である。定形詩に定まつた韻律があるやうに、自由詩には個人の韻律がある。そこに詩が各自の感情を、各自思ふがまゝの形に表し得る自由をもつやうになつたのである。

しかし、國語の中にある古くからの語調といふものは、我々に長い傳統をもつてゐる。小唄などの調子の廢れないのは、我々の

使ふ言葉と七五五七などの調子との或密接な關係を示してゐる。ここにおいて現在の詩でも、この方面の形式をもつた口ずさむによい詩が流行する。その一つが「小曲」であり、また今いふところの「童謠」の如きである。小曲とは、江戸時代からの「小唄」といふ風のもの、やはり西洋風の感情をもたす上から、短詩といふ程の意味で名づけたのであらう。殊に「民謠」の名において、古來の小唄の調子を現代の精神に生かさうとする企もなか／＼盛んだ。つまりごく單純ながら純な感情を、素朴な單純な言葉で表す。そこにこの種の詩の力がある。童謠も民謠の中の一部門と見ていいが、これも現代の純な子供の精神を、やはり手短な形で、單純な言葉で現したもので、現時の詩壇で最も盛んな詩形の一つである。今の詩壇は、過去の「新體詩」時代の詩壇と違つて、若々しい感情による、若々しい言葉、若々しい形式の詩が多い。即ち自由詩の詩

壇である。そこに我々は種々な詩を發見することが出来る。或は官能情緒の世界に自己の表現をかる象徴主義的傾向も見ようし、鮮かな感覺を歌ふ印象派的傾向も見ようし、民衆と聲和して歌ふ民衆派的傾向の詩も見よう。それは各詩人の立場によつて各異なり、そこに個人々々の特徴を見出だし得ておもしろい。そしてどの傾向のものが一番すぐれてゐるといふやうなこともいへない。詩は突きつめれば單に個人のものである。その一個の人の感情の生きてゐるか、死んでゐるか、詩の良い悪いはきまるものである。

六 川柳點

金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、

金子元臣  
國文學者、  
內省御歌所、  
人、學、院、寄、  
學、院、大、  
府、教、授、  
元、年、生、

滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚の調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左にその二三を擧げていひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者、年賀に來て、御慶帳の記名に困り、さらば來ぬ分にして下され」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を玄關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番が付き

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓戒ともなる。

おさへれば薄、はなせばきりぎりす

蘇東坡  
名は軾、宋の  
文豪  
餓蛟云々  
「蘇詩記事」  
中の句

いそがずば云

「いそがずば濡れざらましを旅人のあとよりはるゝ野田道の村雨」(太田道灌)

形容の妙を盡くせり。蘇東坡が「餓蛟取、渴虎」と書けるを、いみじき手柄のやうに驚きし人も、しこの句を見れば、何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし、急がでもわろし。とにかく考物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

柳川井柄



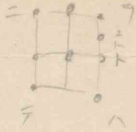
その矛盾がをかしきなり。塙檢校

が、さてく、目あきは不自由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢字に捨假名反點のうるさく左右に附きたるさま、譬へ得て妙昔のヲコト點ならんには、四角な文字に灸をすゑといはばいふ

七  
檢校、可也、座頭、界石



べし。

手紙には狸、臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乗せたる類のこと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくるゝ旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、あまりに酷なる心地す。しかし事實なるをいかにせん。かの赤穂の城渡に、お金配分を唱へし小野九太夫氏は、この露骨なるものか。

かくの如く川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化

小野九太夫  
淨瑠璃「假名  
手本忠臣蔵」  
に出る、赤穂の  
家老で、単独  
食慾な人物、  
實名は、大野九  
郎兵衛

戸隠 手力雄命。長野縣戸隠山にて祀られてゐる。

「袋草紙」 藤原清輔の著で、歌學書。八十島 宮城縣の鹽釜灣附近にある群島。忠盛 平氏。

するのみならず、また最も眞面目なるべき故事・傳説・史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき、岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。毛抜に髭ぬくひま人の所作を神代に附會したる、働きあり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。天日に焦がして顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目はここなり。但し「袋草紙」に「一度においては實か。八十島の記を書けり。」とあり。忠盛の高名の場を犬がなめ抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛越して、高名の場をなめたりといへる滑稽突梯容易に及ぶべからず。

らず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり「盛衰記」頼政ねえ鶴を射る條に、「黒雲とは見たれども、天は實に暗し、いづこを射るべしと矢どころ定かならず」とあり。乃ち郎等隼太が、左近の櫻に鼻衝きあててまご／＼する一場の喜劇を案出し來れるなり。作者は、いかなる剽輕者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつき

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に駆けつくるは、「曾我物語」中の出色の快譚なり。これを圖にして大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根をかじらせたるは、この作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の坂で二度ころび

戸塚の坂は鎌倉入の一難所。元來乗力なき源左が瘦馬、さぞや越

「盛衰記」 「源平盛衰記」 頼政 源氏。

時致 曾我五郎時致。大磯 今の神奈川県大磯町。

佐野 佐野源左衛門常世。戸塚 今の神奈川県戸塚町。

えなづみしならん。さるを二度までころびたりと誇張したるに、  
大なるをかしみを生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるところに  
一種のおもしろみあるなり。

釣れますかなどと文王そばへ寄り

さすがの聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るに  
は極めて平凡ならざるを得ず。たゞなどと語、胸に一物ある趣  
を状し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

七 俚諺論

大西 祝

ローマの一詩人がエピグラムを蜜蜂に譬へて、螫あり、蜜あり、  
體は小さし。といへるは、すべての俚諺にとはいひ難きも、その最

大西祝は、探山、文學、哲  
學者、岡山文學博  
士、明治三十  
二年歿。  
エピグラム  
警句。

も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは  
多くはこの三者を具ふ。言短くして意義味はふべく寸鐵人を刺  
すの妙あり。

人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺はおのづから  
律語をなす傾きあり。我が國語にては、五または七がおのづから  
なる律呂なれば、我が國の俚諺には、この律に従へるもの甚だ多  
し。雉子も鳴かずばうたれまい。心の鬼が身を責める。といふ如く  
最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはい  
と多し。人と屏風はすぐには立たぬ。思ふ念力岩でも徹す。身を捨  
ててこそ浮かぶ瀬もあれ。などは、七七の調子をなして語呂頗る  
よし。十で神童十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。といふも、その  
語に律あり。右と同じ理由により、同語または同音を重ねたる類  
のものも多し。例へば、多勢に無勢。短氣は損氣。弱り目に祟り目。所

かはれば品かはる。『藥九層倍。勝つて兜の緒をしめよ。』といふが如し。かく律を成し、尾韻または頭音を合はすこと、詩の句法に似たるところあるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具體的にいひなして、感動の強からんことを求め、またこれがためにしばしば誇張の言を喜ぶなども、それが詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量をいふには、その數または量を定めていふを好む。七たび搜して人を疑へ。人の噂も七十五日。預りものは半分の主。などの類は數ふるに違あらず。數の中にも、最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。三度目が定の目。三年たてば三つになる。懺悔話をすれば三年の罪が滅びる。三人よれば文殊の智慧。三人よれば人中。朝起は三文の徳。その他なほ多かるべし。また用心は臆病にせよ。黒犬にくはれて、灰汁あかじの和滓わかずにおされる。などは、誇張していふによりて、その意味を成せるものの例なるべし。

パラドックス  
一見矛盾した  
やうで、その  
中におのづか  
ら眞理を含ん  
でゐる語。

誇張を喜ぶと同じ理由をもつて、俚諺は一見まことしやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。この種の諺に深く味はふべきもの少からず。急がばまはれ。いはぬはいふに勝る。逢ふは別れのはじめ。兄弟は他人の始り。論語讀の論語知らず。人を使ふは使はれる。など、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、却つて相通ずるところあるを發見するは、深邃なる智慧の一特徴なり。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相並ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。骨折損のくたびれ儲。聞いて極樂、見て地獄。問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。長者の萬燈より貧者の一燈。などその例なり。反對を並ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相並べてそれを比照するは、俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喩に富める所以

ふりまの  
白き

にして、その比喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥づかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多くこの類にあり。今思ひ出づるに随つてその三四の例を掲げんか。馬には乗りてみよ、人には添うてみよ。『旅は道づれ、世はなさけ。』といふ如きは、幾たび唱するも趣味の津々たるを覺ゆ。花は櫻木、人は武士。これ我が國民のもつて、それが理想を誇るに足るものの一なるべし。佛法と藁屋の雨は出でて聞け。風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえいひ出でん。これを口ずさみみよ、いかに詩心、道心、宗教心の相結びてなせる高雅幽玄なる妙趣の浮かび來るぞ。

かく二つの事を並べ出でて相比照することなく、たゞ普通の暗喩を用ひたるものも頗る多し。例へば、『商賣は牛の涎。』『祕事は睫。』といふが如し。而して更にその喩のみを掲げて、他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。蟹は甲に似せて穴を掘る。『目糞、

鼻糞を嗤ふ。』といふ如きはこの例なり。

かく比喩の用ひやうは數種あれど、そのこれを用ふるは、寓言における用ひ方とは同じからず。『目糞、鼻糞を嗤ふ。』といふ如きは、多少寓言に近よれるところあるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は叙事(物語)の體裁を具へ、前者は然らざる點において全く相異なり。

同じく意を寓して比喩を用ふるも、寓言はこれを出來事または動作として語り、俚諺は時間に結ばずして、たゞ常恆の事實として語るなり。

(天西博士全集)

### 八 心の落葉

九條 武子

#### 一 理智と情操

日本婦人の最も讚美すべき特長は、豊かに恵まれたその情操

ふりまは  
夏目白く、  
初雪

九條武子  
歌人、京都市  
の、昭和三年  
卒。

自然の  
なせりめた

其の物に  
よき

である。そして日本婦人に最も望ましいものは理智である。理智の光のない愛は盲目に終る。理智の燈炬を高くかざして、

始めて盲愛の闇路より出づることが出来る。しかし理智のみの生活は、たとひ愛を解しても、みづから愛に充たされることは出来ない。

我等の愛は、理智の導きによつて、正しい成長を求めなければならぬ。そしてこれを永く撫育してゆくものは、おのづからにして鍛へ上げられた情操に他ならない。理智に明らかにして、しかも濃やかな情操を保持するところに、よき均衡と、調和された豊かな生活が展かれる。



九 條 武 子

二 許しあふ心

心に願ふすべてのものに恵まれてゐても、心から信じ許しあふまことの友は、求めて得難いものである。

互に信じあふことの出来るのは、互の人格を敬愛しあふからである。互の人格を信じ、心から許しあふことの出来るのは、同じ信念の世界において、限りない愉悅を抱きつゝ、共に歩んでゐるからである。

今日の社交と名づけられるものは、單なる追従と美辭の交換に過ぎないのは、悲しいことである。花を見て花の心に觸れぬ、この寂しさの中に見出だした、まことの友こそ、何にもまして尊いものである。

三 虚偽の美

自然のすがたには、何人も反感をもたない。それは徒に飾られ



た詐がないからである。

梅も百合も、さては名もない野の花も、自然の寵兒は、みづからに恵まれた個性を、すなほに發揮してゆくところに、みづからの生命を愉躍し、そしてよく他と調和して、自然界の平安な美を保つてゐる。

しかし人生の美を分擔してゐる女性が、徒に裝飾を俟つて、作られた美を顯さうと努めてゐる。本眞を忘れて、技巧を弄するところに、痛ましい美の混亂が生じて來る。

本眞に逆らふ虚偽の美より醜いものはない。

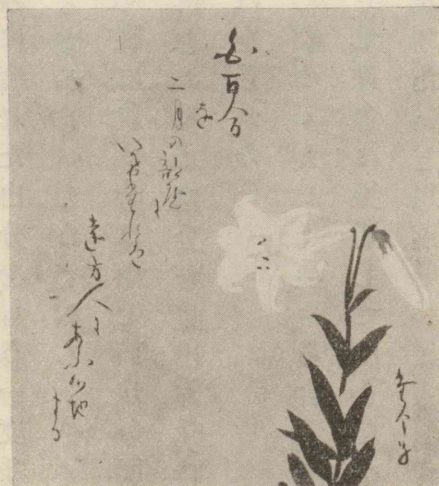
#### 四 不滅の仕事

生命を打ちこんだ自分の仕事をもつてゐる人は、その仕事のどんな種類であるにかゝはらず、何人も尊敬せざるにはをられない。たとひその一生に成し遂げ得ずとも、永遠に滅びることのない

い生命が、そこに見出だされる。

私たちは、許された短い生命を惜しまねばならぬ。しかし多くの人は、單に限られた生命の延長のみを希ひ、限りない生命を育むことを忘れがちである。千古の教を垂れた古への聖者たちや、藝道の上に不滅の光を放つた古人の努力をみるにつけても、短い生命を育て上げることの尊さが感ぜられる。

自分の生命を打ちこむことの出来る仕事をもつてゐるものは幸福である。そこにいかなる苦難が押寄せようとも、絶えざる感謝と新しい力のもとに生きてゆくことが出来る。



筆染子武條九

白百合の花は、二月に咲く。その花は、遠く地方に咲く。

生命は仕事と共に不滅である。

五 眠に入る時

その日の仕事を終へて、眠に就かうとする時、靜かに一日中の自分を回想してみる。一日の營みに疲れた自分を、もう一度呼返してみる。それは涙ぐましいほど懐かしいものである。

何の思ひわづらふこともなく眠に就く時は嬉しい。快い回想のうちにも、ともすれば暗い影にをのゝく自分を見出だす時は、限らない寂しさに襲はれずにはをられない。

自分をしみるゝと省みることは、つゝましく生きる合掌である。私たちは、絶えざる懺悔を通して、丹念に生活してゆきたい。そして何の憂もなく平安な眠に入りたいと思ふ。

(無憂華)

九 婦人と家事經濟的自覺

松平友子

松平友子  
東京女子高等  
師範學校講師  
東京市の人、  
明治二十七年  
生

バス  
乗合自動車。

婦人の職業は歐洲大戰後頓に進展し、學校、病院にはいふまでもなく、百貨店には女賣子あり、バス、電車には女車掌あり、エレベーターには女運轉手あり、銀行、會社には受付から記帳に、タイプライターに女事務員あり、更に一步足を工場に進めれば、紡績工場に、製絲工場に、製菓工場に、その他あらゆる工場に婦人労働者のかひくゝしい姿が充ち満ちてゐる。

しかしこれ等職業婦人にも、やがては他の一般青年婦人と同様に、一家の主婦たり母たる日が來ることであり、また中には既に、他面家庭婦人たるものも少くない。この意味において、婦人は早晚、家政運用者としての役割を果さなければならぬものであるから、もし家政に就いて無知であつたならば、誰しも婦人として、最も直接現實的な日常生活上の能力を缺くものといはなければならぬ。

さて、家庭の根本的任務は、人類の生活を支持し、種族を繼續することをもつてその最大最重のものとするべきであらう。この他にも家庭の任務として挙げ得るものは多々あるが、いづれも時代の變遷により、或はかつてその任務であつたものが、今は他の機關によつて行はれ、或は現にその任務であるものも、他の機關に代用せしめ得るものである。しかし、生活支持と種族繼續の二大任務は、家庭を措いて他にこれを求めることが出来ぬ。隨つて家政に就いて必須な知識にも多々あるが、就中、家事經濟と育兒に關するものは、その最も重要な根本的知識である。

然るに我が國の婦人は、歐米の婦人に比して、一般に家事經濟の思想に乏しく、また育兒の知識と實際を心得てゐない。今はここに育兒に關する問題は措くが、歐米諸國は物質文明の發達が早かつただけに、自然、科學的知識や經濟思想が一般婦人にまで

も普及して、その應用が比較的徹底してゐるから、國民の生活上に不合理と認めるべき點が殆ど全部除かれてゐる。國民の多年教養の結果、衣食住・社交などに關する日常生活が、よくその本來の意義に適ふやうに改良せられてゐる。これに反し我が國に在つては、いまだなほ國民一般、殊に婦人にこの種の素養が乏しく、科學的に事物を批判する能力が幼稚なため、衣食住・社交などにつき、その本來の意義を没却して、甚だ無意義・不經濟な生活に安んじてゐる。いかにせば日常生活が簡易且愉快になり得るか、いかにして家計を不足なく立てるべきか、いかにせば生活の改善向上を圖り得るかなどの問題に對して、正しい理解・見識が足らず、また實行の勇氣に乏しいやうに考へられる。例へば、日常食膳に上す食料品も、なるべく安價で榮養價に富むものを選ばうとせず、初物の走りを用ひることを誇とする。日用品の買入れ方に

就いても、主婦みづからが市場や街に行つて吟味した上で購はうとせず、女中御用聞まかせにすることを得意とする。

かくの如く食料品の選擇上に不合理やむだがあるのみでなく、その調理法においても燃料を浪費し、野菜・魚肉の役立つ部分や貴重な成分を惜氣もなくうち捨て、また獻立法においても配分よろしきを得ぬため、過食・大食となるなどの浪費が多い。食物費は生活費中の最大部分を占め、中流階級においてさへ、その三四割に當つてゐるから、生活の合理化はまづ食物のそれから始まるといふべきであらう。

被服に就いても、我が國は一般に費用をかけ過ぎてゐるやうである。幾通りも同じやうなものを作つて、箆筒の底にしまつておくことを誇とする風がある。被服は實際必要あるもののみに整理し、且洋服常用の人は、和服を常着のみにとゞめて、禮服まで

も作らぬやうにすれば、從來よりもよほど少い數で濟むことであらう。また被服地は種類によつて耐久・保溫・防濕などの點で、それぞれ特色を異にしてゐるものであるから、よくその長所・短所を知つて適材を適所に用ひ、更に被服の保存・手入れ・仕立法などにも工夫を凝らして、その使用年限を延ばすことが出来れば、たゞに被服費の節約となるのみでなく、同時に少からぬ手數と時間を省くことが出来るから、婦人に必要な時間の餘裕をもつくり得ることになる。

その他、訪問・贈答の如き社交上の事柄に就いても、複雑に過ぎる冗費が多い。婦人が他家を訪問するには、手土産を持たなければ行かれぬと考へ、また來客の接待にしても、時刻でもないのに飲食物を出したり、妄りにこれを強ひたりする。なほ來客に饗する食物も、外國に比して一般にその品數が多過ぎる弊がある。こ

の點は、宴會の料理や宿屋の食膳に就いても同然である。殊に婚禮葬儀の如き儀式に至つては、徒に華美を競ふ風がある。私どもは衣食住社交などの本來の意義に溯つて、在來の習慣様式を批判し、不適當と認められたものは斷然これを改めて、生活の充實向上を圖らなければならぬが、これがためにはまた計畫ある生活を營むことが肝要である。歐米人は一般に家計の豫算を重んじ、月々豫算を立てて計畫ある生活を營むと共に、一箇年を通じて同じく一定の計畫の下に生活し、遂にはこれを生涯に及ぼして、老後のために相當の備へをする。我が國の家庭においても、家計簿記を備へて收支の記帳を怠らず、一定の豫算内で計畫ある生活を營む風を養ひたいものである。かくの如き婦人の家事經濟的自覺は、たゞにその一家の生活向上をもたらすにとゞまらず、その國民經濟の隆盛をも促すも

〔禁轉載〕

瀧澤馬琴 名は解、江戸時代末期の作家、永年歿。大塚番作 足利持氏の習子、大塚氏の持子、大塚氏の結納、大塚氏のつたが、遺子に於て、その時通に赴いた。信濃に赴いた。

のである。蓋し婦人は、諸國何方においても、多くの場合家庭の經費一切の支出を男子からまかされてゐるから、その國の富の大部分は婦人の手に支配せられてゐる。この意味において婦人の家事經濟的自覺は、一國の大なる資源をなすものである。而して眞の文明國たる一要件は、その國民經濟の發達してゐることにある。さればまた婦人の家事經濟的思想は、文明國人としての常識といふべきである。

一〇 信乃の生立

瀧澤馬琴

大塚番作が年來の志願漸く遂げて、寛正元年秋七月戊戌の日に男兒出生し、母も子もいとすくよかに、産室をさむる頃になりぬ。さて兒の名を何とか呼ばん。と女房手束に語らへば、手束は暫くうち案じ、世に子育てのなきものは、男兒ならば女の子とし、女

寛正  
第百二代後花  
園天皇の御代、  
足利六代將軍  
義政の世

の子には男名つけて養ひ育つれば恙なしとて、しかする人も稀にははべり。我が夫婦に幸なくて、男兒三人擧げしかど、皆みづ子にてなくなりたるに、このたびもまた男兒なれば、一入心弱くなりて、想ひやりのみせられはべり。この子が十五にならん頃まで、



瀧澤馬琴

女の子にして育まば、恙あらじと思ひはべり。その心して名づけ給へ」といふに、番作うちほゝゑみ、「死生命あり、名の咎ならんや。物忌多き世の僻事いと信け難き筋なれども、御身が心やりにもならば、世に従ふもわろきにあらず。古語に長きを『し』といふ。我が子の命長かれと祝の心もて、その名を信乃と呼ぶべきか。この名はいかに」とまめだちて問へば、手束は聞きあへず、「そはいとめてたき名にはべり」とて、これより信乃

墓六  
龜篠の夫。  
龜篠  
番作の姉。

が衣裳を女服にせざるはなく、三四歳の頃に及びて、髻髪おくほどもなれば、櫛ささせ、簪ささせて、「信乃よ〜」と呼びしかば、知らざるものは、この兒を女の子ならんと思ひけり。

されば墓六、龜篠は、このていたらくを見聞くごとに、掌拍ちて冷笑ひ、凡そ人の親たるもの、男兒を擧ぐるを面目とせざるはなし。然るに武士の浪人が、女の子を願ふはいかにぞや。結城合戦に逃げおくれ、背疵受けしにいたく懲りて、軍といふもの夢にも見せじと思ひて、かくまで戯氣を盡くすか。思ひしにます痴者なり。」と、さかしらだちて譏れども、相鉗はやすものはなく、なか〜に里人等は、信乃を愛して物をとらせ、かたみ代りに抱きとりて、その母の手を助けしかば、墓六夫婦はいとどしく、妬きこと限りなし。また羨ましく思へども、龜篠四十に餘るまで、子供一人もなかりしかば、夫婦しきりに談合して、ひたすら養女を索むるに、そが

練馬  
今の東京市板橋區練馬町  
當時練馬町左衛門の所領であつた。

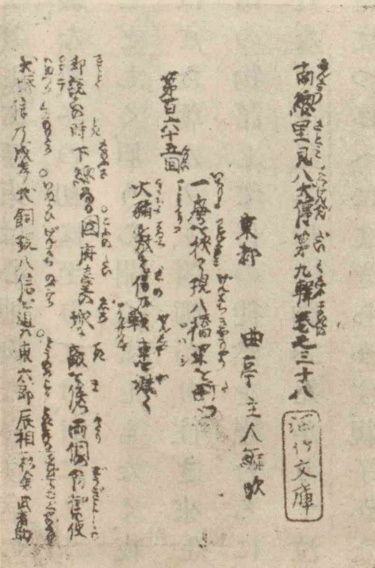
媒妁するものありて、練馬の家臣某といふものの女兒、今年僅かに二歳になるを、生涯不通の約束にて養ひとり、濱路と名づけて、分に過ぎたる綺羅を飾らせ、やゝ東西を知る頃より、絲竹の技に師を擇みて、朝より夕べまで、うち囃し、舞躍らせて、絶えて四隣を憚らず、萬づあだに養ひたつるに、生まれ得たる顔ばせの、人なみなみに立ちまされば、鳶の子に鷹ありとて、女兒を譽むる陰言を、聞く二親はほゝゑみて、我を嘲るよしを曉らず、位高く富み榮えて、世に威徳ある婿ならで、えこそはとらじと誇りけり。

それはさておき、番作が一子信乃は、はや九歳になりしかば、骨逞しく、膂力ありげに、尋常なる人の子が、年十一二になるものより、身の丈ひとかさ高かるに、なほ女服着せられて、雀小弓に紙鳶、印地打竹馬など、萬づの遊も荒々しきまで、おのづから武藝を好めば、番作ますゝ、鍾愛して、朝には里の總角と共に手習させ、

瀧の川  
今の東京市瀧野川區瀧野川町

夕べには儒書軍記の句讀を授け、また或時は試みに劍術拳法を教ふるに、もとより好む道なれば、その技の進むこと、親すらしばしば舌をふるひて、末頼もしく思ひけり。

さて、信乃が生まるゝ頃、母親手束が瀧の川なる、岩屋詣での歸るさに、將て來つる狗の子は、信乃と共に大きくなりて、今年は既に十歳なり。この狗、背は墨より黒く、腹と四足は雪より白ければ、その名をやがて四白とも、また與四郎とも呼ぶほどに、年來信乃によく狎れて、打ちたゝかれても怒ることなく、手に屬き、その意に隨ふにぞ、信乃は件の與四郎に、索たづなをかけて



稿原「傳大八」

信乃  
平太  
大  
町

うち乗れば、犬は主のこゝろを得て、足搔を早めて幾返りかす。この童子がていたらく平人たゞものにはあらじとて、賞歎するも多かりけり。

さるほどに、今年秋の頃よりして、手束は心地例ほどならず、病の床に臥ししより、鍼灸薬餌しよしの驗なく、冬の初に至りては、日にく弱るばかりなれば、番作はいとどしく、眉うち開くよしもなく、夜とて安くはまどろまず。信乃はまた朝な／＼、醫師がり往き來しつ、薬を進め、腰をさすり、四方山の物語して母の徒然を慰むるに、思はず涙目に満ちて、やるかたなきを見る母は、胸ふたがりて泣顔を隠すよしなく、鳩尾みづおちを撫でてつかへにまぎらかす。親子かたみに思ふこと、いはねどしるき孝行慈愛、心ぞ想ひやられたる。

かくてそのあけの朝、信乃は薬とりにとて、いそしく出で行きしが、冬の日なれば短くて、はや巳の頃になりしかど、常にもあら

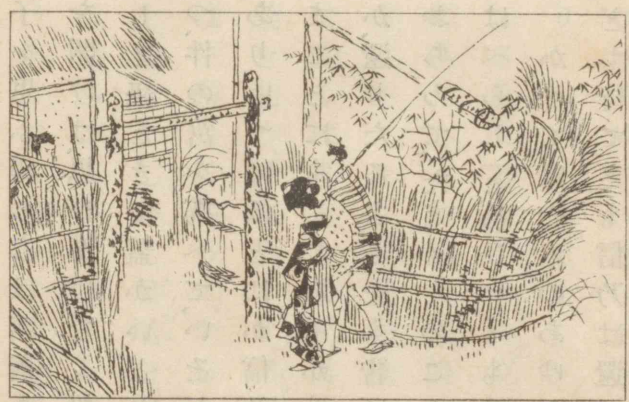
で信乃は還らず。彼路草をくふものにあらず、いかにしつらんと、子を思ふ親の心は落着かず。番作は外面とがへ、出でて見んとて障子を開けば、思ひがけなく縁側に、薬のかよひ筥はあり。こはいぶかしと紐ときて、蓋かいとれば、薬もあり。さもこそと片頬に笑みつつ、件の筥を携へて、いそがはしく内に入り、手束よ、薬はかしこにあり。いつのほどにか信乃は還りて、氣鬱を晴らしに出でにけん、まことに童ごころこころぞかし。いかばかりおもしろきもの見かけてか、還りたるよしをも告げず、また出でたり。といふに、手束はや、おちゐて、たま／＼のことなるに、必ずな叱り給ひそ。還るに程ははべらじ。と、いひつゝ、もその顔見ねば、片心にぞかゝりける。

かくてはや、未まのあゆみ過ぎにけん、日影斜になる頃まで、待てども待てども信乃は還らず。よしや遊に耽れりとも、餓ゑなば興も盡くべきに、ものをも食はていづこにをる。心得難き事なり。と、



たつね  
宗一  
三尋

巢鴨  
今の東京市豊島區巢鴨町



(筆俗雪村小) 乃信と助糠

父すらいへば母はなほ、重き枕を幾たびか、擧げて眺むる外面に、板金剛の音すれば、それかとぞ思ふ、だまされて、人の足さへ恨みけり。妻がかこてば番作も、立つてみ、居てみ、待ちわびて、思はずも歎息し、我が足むかしの如くならば、たゞ一走り走りめぐりて、必ず索ねて將て還らんに、日影短き小六月、夕日を見つゝ、杖にすがりて、いづちまで行かるべき。さりとて暮れなばいよ、便なし。巢鴨までも、と一刀を、さして竹杖つき試み、はや外面に出でんとす。かゝるところに番作が背戸の向ひなる百姓に、糠助と呼ぶる

不動の瀧  
瀧野川成就院の境内にある

るもの、右手に一條の釣竿と、一箇の魚籠を携へて、左手に信乃を扶け引き、いそがはしく詣來つゝ、今外面へ出でんとする番作と面をあはせて、呵々とうち笑ひ、犬塚氏か。秋の稼ぎもしはてたる、骨休めにと我と我が、一日の暇を賜はり、今日は未明に浮かれ出でて神宮川に雑魚釣暮らし、瀧の川を還り來れば、ここなる息子が不動の瀧に水垢離執りて、身は冷え徹り、息も絶ゆべき有様を見つけし時は、膽潰れて、あわてふためき引出だし、そがま、坊へ將て行きつ、藁火にあたゝめ、藥を服ませ、法師ばらも共、いはること半時ばかり、始めて我に復りしかば、湯飯もらうて腹を肥やさせ、事の故を尋ねれば、母の大病平癒の祈禱に、水垢離をとりしといふ。十にも足らぬ童には、類稀なる大孝行、法師ばらも感心せられて、求めざれども當病平癒の神符洗米を賜はりぬ。件の瀧は寺へ遠くて、我が外に人知らざりき。まことに危きことなり

一〇 信乃の生立

し。かくまで賢しき子なり、親なり、佛神見放ち給はんや。母御は本復疑なし。いざ子實を受取り給へ。暮れかゝれば、はや罷るなり。病む人によく心得てよ。要あらば背戸口から、竹螺鳴らして呼び給へ。わ子よ、明日は遊びに来よ、この魚炙りて食ませんに。」とおのがいふこといひ誇り、人の挨拶聞きはてず、内にも入らで還りけり。さてはとばかり番作は、我が子をほとり近く侍らし、信乃、よくものを心得よ。孝行つくすも程あるものなり。身を危めて怪我あらば、親の歎きはいかなるべき。かくては孝が不孝ぞかし。親いとほしと思ふ子のためには、祈らでも神は守り給はん。」と諭せば、信乃は涙ぐみ、宣ふところ心得はべり。今朝醫師がり赴きて、薬賜はりて還りし折、家尊に、家母のものがたり、信乃が命の長かれと、勿體なくも我が母は、命を贄に神々へ、祈らせ給ひし驗にや、長きいたづきに臥し給ふと、宣はせしを立聞きて、悲しきこと限りはべ

家尊 美いよ  
母

らず。涙に濡るゝ片袖を、泣聲立てじとかみしめて、縁側についゐたりしが、親の願望驗あらば、我が願望も驗ありなん。いかでこの身を贄にして、母の命に代らんと思ひ定めつ、もてかへりし薬をそこにそと置きて、年來母の信じ給ふ、瀧の川に走り行き、岩屋の神に思ふこと、繰返したる瀧の絲、心強くも身をうたせ、ひとたびは死にはべりけん、その後のこと知らずはべり。さてあるべきにゆくりなく、糠助男に妨げせられて、生きて還るは願望を、神は受けさせ給はぬにや。いと口をしく悲しくはべり。と、いひかけて目を押拭へば、手束はよゝと泣沈み、世に子をもたぬ親はなけれど、今日死するとも我が身ばかり、幸あるものはなきぞとよ。八九歳のをさな心に、賢しや親に代らんと、祈る誠を神明の、受け給へばこそ瀧壺の、水屑とならで還りけめ。かくまでに命運強き我が子の上を見るからに、行末さへに頼もしく、歡ばしさに涙のみ、はふ

れ落ちてとゞめ難し。母が御身に代らんとて祈りしは惑なり。驗あるべきことならぬに、返すくもよしもなき願立なし給ひそ。と、涙の隙に諭しけり。河内・山崎の里に生れたる南總里見八犬傳

一一 冬の追想

三木露風

三木露風  
名は操、詩人、  
兵庫縣の人、  
明治二十二年  
生

冬になつて紅葉も既に凋落し、時雨がさらさらと降つて来る。さうして落葉した林に淋しい姿を見せて、朽葉の色を深める。遠くから風に吹かれて降つて来て、また反對の方へとだん／＼音が微かになつてゆく。あたかも空中の波のやうに時雨は揺れつつ降る。夜は殊に時雨の音を聴いてゐると、情趣のあるものである。時雨は淋しいが懐かしい感じがする。書を読む眼をそらして耳を傾ける。心を時雨にまかせるやうにして、遠くなり近くなるさ／＼やかな響を追ふ。郊外の我が家の近くには林がある。この林

の外で時々人が晝を描いてゐたり、焚火をしてゐたりする。芥や落葉を掃集めて、手拭をかぶつた女が箒片手に、燃えゆく火を見詰めてゐる。枯葉の燃える匂がして、青い煙が風のまに／＼横に這うて、また上へ上つてゆく。そこへ、折しも時雨が降つて来て、煙の中へ落ちる。冬の趣に時雨がないならば淋しいと思ふ。霜柱が立つやうになり、北の空に灰色の雲が見えるやうになると、北の國に雪の降つた噂などをする。さうして北海道の雪の旅を私は追想する。



雪の國

廣島市大牛町  
ハナリ

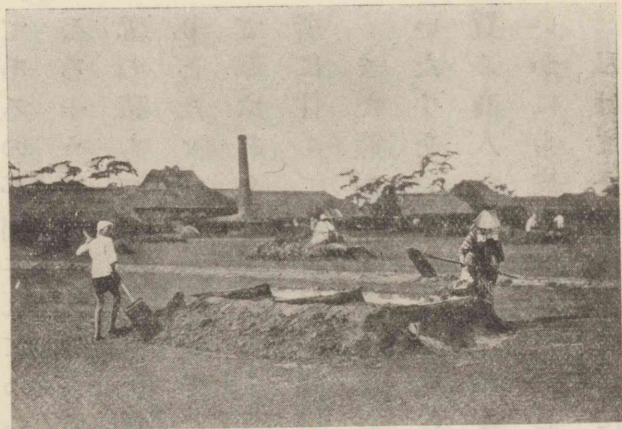
——橇が雪の上を走つて行く。りん／＼と鈴の音を鳴らして、その影は雪の降るためにおぼろになる。それを見送つてみると、北國人の生活といふことが思はれる。北國人にとつては、橇は冬の生活に大事なものである。雪が四五尺も積もつてゐると、容易に歩行し難い。橇に乗つて行くと、すべるやうに早く行くことが出来る。北海道では大概馬が曳いてゐるが、樺太では犬が曳く。橇に乗つてゐると愉快なものである。遠くの蒼緑をした杉の林などを眺めながら、雪の中に行く。向ふからも橇に乗つて来る者があつて、鈴を鳴らす。さうして、聲をかけあつて挨拶をする。

小學生は冬になると通學が困難である。殊に吹雪の日になると、幼い子供が全く歩けなくなつてしまふ。その時村では、大きな橇に子供を一杯乗せて、大人が同乗して馬を驅けらせる。子供は元氣に聲を揚げる。馬は驅ける。さうして、勇ましい鈴の音がする。

北海道の鐵道各驛には、冬になると、大抵赤い札に「風雪」と書いてあるのが出されてゐる。その赤札に北海道氣分が濃厚に出てゐるやうに思はれる。汽車の窓から眺めると、落葉松やトト松に雪の積もつてゐる景色が続いてゐる。また雪の曠原の中に、ぼつりとたゞ一つ小屋のやうな民家があつたりする。その孤影てんごうの影を見て私は、あんな所でよく生活が出来るものだと思つた。さういふ所に住んでゐる者は、熊狩をして朝から晩まで暮らすと聞いた。また、熊が牧場の牛を負うて山の方へ歸つたといふことも聞いた。牛を負うて行く熊の力の強いことに驚かされる。熊の皮を買ふ商人が村を歩いてゐるのを見た。赤い毛布を着てゐるのが、いかにも皮買商人の感じがした。

私はまた越後の海岸にゐたことがあるが、砂山に立つて佐渡が島を望むと、日本海に荒波が立つて淋しい氣がする。灰色の雲

が低く垂れて、今にも雪が降りだしさう。海上に船の見えない日



屋 鹽

は、一層佗しい眺である。砂山を下りて海岸を歩いて行くと、鹽焼く煙が見える。釜のある小屋には誰もをらずに、たゞ煙のみが立つてゐる。海から吹く風が苦屋を吹いて筵戸をはたはたと動かし、濕つた潮の氣を吹きつける。子供が二三人、つゞれを着て草履をはき、村の方から砂濱を歩いて来る。そして流木を拾ふ。けれども子供のことであるから、濱に引上げられた小舟の傍で、何か話しながら遊ぶ。干した網に風が吹いて動く。砂山の向ふに村の藁屋根が

半分ほど見えて、鳥が寒さうに飛んでゐる。行くうちに、また向ふに砂山が二つも三つもある。私はそれに上つて、海の白波を見る。さうして鞆と寄せて来る波が渚に碎けるのを興味深く思ふ。ずつと遠くの汀にも白波が寄せて、その音が微かにこちらへ傳はつて来る。遠くの丘には枯草が靡いてゐる。そこは防波堤である。北海の濱邊は一里行つても二里行つても變らぬ趣がある。私はまた或溪谷に近い山莊で冬を越したことがある。小鳥が朝ごとに來て鳴いた。さわやかな聲で、透きとほるやうな空氣を響かせて鳴いた。谷川のほとりに立つと、落葉しきらない梢から一枚二枚の朽葉が、微かな音をたててはら／＼と落ちて来る。見上げる冬の空は青い。谷川には落葉が流れ寄つて、かたまつてゐるために、水の通り

が悪くなつてゐる。ところ／＼石が飛出て、冷たい飛沫が上がつてゐる。夏の日には山蟹が匍ふのを見たが、冬の谷では見ない。山の木からつりさがつてゐた赤い烏瓜も、零餘子も、今は枯れはてて、僅かに朽ちた蔓がまつはるのを見るばかりである。

山莊の夜は殊の外冷える。月が山の端に出て、樹立の暗い影と共に縁側から眺めるのは淋しい。都會で見る月、海で見る月といろいろ冬の月もあるが、山莊で見る月は最も淋しい感じがする。樹の間の道は、夜になれば人一人通らぬ。寂寞として風のない時は、一層しんとして、冬の威嚴ともいふべきものを感じしめる。しかし、私は獨り山の路を月を見つゝ、逍遙するのが好きであつた。下の方には、野と村とが、微かな光の中に横たはつてゐる。人が皆寢靜まつた夜に月は互えわたつて、天體の運行はその推移をやめない。星座の幽玄神祕なことを最も感じさすものは冬の夜の

空であらう。

雪の降る日には、裏の竹林にさゝやかな音をたててゐるかと思ふと、もうそのさら／＼といふ音がしなくなる。やんだのかと思つて障子を開けて見る。雪が竹の葉に積もつてゐるためにもはや葉に直接觸れる音がしなくなつたのである。さうして音のないのが却つて積もるので、夜が明けて見ると、竹は重さうに雪をかぶつて垂れてゐる。どの竹も皆頭を下げて、そのうちの一二本は重みに堪へないで、夜のうちに折れた。

雪の日に、谷の石が白くなつてゐる。さうして岩間の水が白雪に對して碧色に冷たく光つてゐるのは畫趣がある。そこへ小鳥が來てゐるのを見る事がある。雪の晴れた朝、いつもよりは青い空に、鳶がのんびりと舞うてゐるのを見ると、小春日に似た濶かな氣持になる。山莊で冬にも色變へぬ樹は松や高野槇である。夏

の時盛りであつた白百合は、その莖が赭色に枯れて佗しく立つてゐる。それを見るのは淋しい。山から見る東の空と海との陽光と、潮の響とが、やがて新しい春を告げるのを私はそこで喜んだ。

一二 嘉辰令月

春興

劉禹錫  
字は夢得、支那唐代の詩人。

劉禹錫

野草ハ芳菲タリ紅錦ノ地、遊絲ハ繚亂タリ碧羅ノ天。

山部赤人

奈良時代の歌人、歿年不詳。

山部赤人

思ふも、しきの大宮人は暇あれや櫻かざしてけふもくら

夏夜

紀長谷雄  
平安時代初期の漢詩人、延喜十二年歿。

紀長谷雄

空夜窓ハ閑カナリ螢度リテ後、深更軒ハ白シ月明ラカナル初。

郭公

許渾

一聲ノ山鳥曙雲外  
萬點ノ水螢秋草中

明香王子

さつきやみおほ  
つかなきにほと  
こゑのいとゝは  
るけき

郭公

一、山鳥曙雲外、  
萬點水螢秋草中  
さつきやみおほ  
つかなきにほと  
こゑのいとゝは  
るけき

(筆成行原藤傳)「集詠朗淡和」

紀貫之

なつの夜はふすかとすればほとゝぎす啼くひとこゑに  
明くるしののめ

秋月

郭展

郭展  
傳不詳。

紀貫之  
平安時代初期の朝臣、歌人、天慶九年歿。

凡河内躬恆  
平安時代初期  
の朝臣、歌人、  
延喜七年歿。

秋水漲り來ツテ船去ルコト速ク、夜雲收マリ盡クシテ  
月行クコト遅シ。  
秋水漲來船去速。夜雲收盡月行遲。

凡河内躬恆

白雲にはねうちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の  
夜の月

雪

白居易

白居易  
字は樂天、支  
那唐代の詩人、  
武宗の六年歿。

銀河沙漲ル三千里、梅嶺花排ク一萬株。

銀河沙漲三千里。梅嶺花排一萬株。

坂上是則

み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさ  
るなり

坂上是則  
平安時代初期  
の歌人、延長  
八年歿。

謝偃  
支那唐代の詩  
人。

謝偃

祝

嘉辰令月歡極リ無ク、萬歲千秋樂シミ未ダ央バナラズ。  
嘉辰令月歡無極。萬歲千秋樂未央。

慶滋保胤

長生殿ノ裏ニハ春秋富ミ、不老門ノ前ニハ日月遅シ。  
長生殿裏春秋富。不老門前日月遲。

詠人不知

わが君は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔の  
むすまで  
(和漢朗詠集)

一三 菅公の左遷

醍醐の帝の御時、時平のおとど左大臣の位にて、年いと若くて

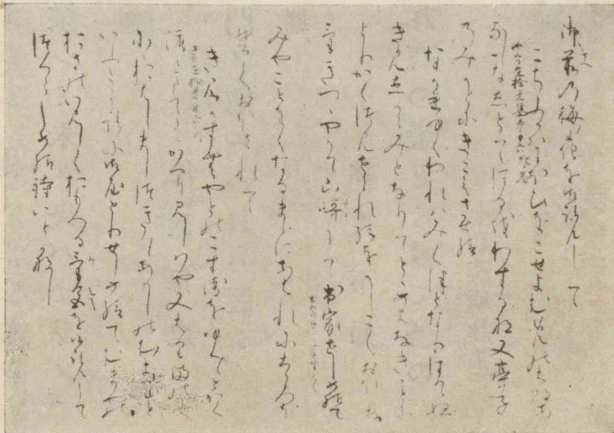
醍醐天皇  
第六十代。  
時平のおとど  
藤原時平。

慶滋保胤  
平安時代中期  
の文人、割髪  
して寂心と號  
した。長徳三  
年歿。

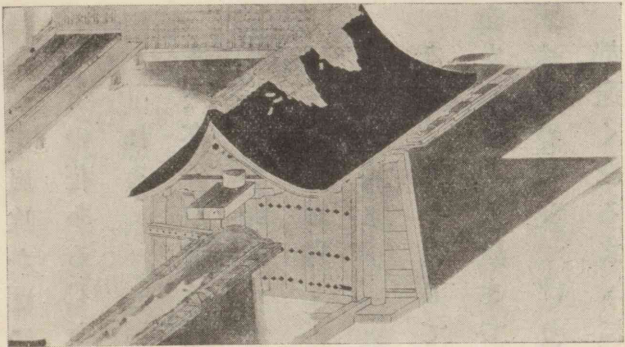


菅原のおとど  
菅原道真。

おはします。菅原のおとどは右大臣の位にておはします。その折、  
 帝御年いと若くおはします。左右の  
 大臣に世の政行ふべき宣旨下さし  
 め給へりしに、その折、左大臣御年二  
 十八九ばかりなり。右大臣の御年五  
 十七八ばかりにやおはしましたしけん。  
 共に世の政をせしめ給ひしほどに、  
 右大臣はさえ世にすぐれ、めでたく  
 おはしましたし、御心おきても、殊の外に  
 かしこくおはします。左大臣は御年  
 も若く、さえも殊の外に劣り給へる  
 によりて、右大臣御おほえ殊の外に  
 おはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、さるべきに



大「鏡」古寫本



菅家の門

やおはしけん、右大臣の御ためよからぬこと出でてきて、昌泰四  
 年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて、  
 流され給ふ。  
 このおとど、子どもあまたおはせしに、  
 女君たちは婿取し、男君たちは皆ほどほ  
 どにつけて位どもおはせしを、それも皆  
 かたぐに流され給ひて悲しきに、いと  
 けなくおはしける男君、女君たち慕ひ泣  
 きておはしければ、小さきはあへなんと、  
 公もゆるさしめ給ひしかば、共にゐて下  
 り給ひしぞかし。帝の御おきて極めてあ  
 やにくにおはしますれば、この御子どもを、  
 同じかたにだに遣はさざりけり。かたぐにいと悲しく思し召

して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅  
の花あるじなしとて春なわす

れそ

また亭子の帝に聞えさせ給ふ。

亭子の帝  
宇多天皇(第  
五十九代)

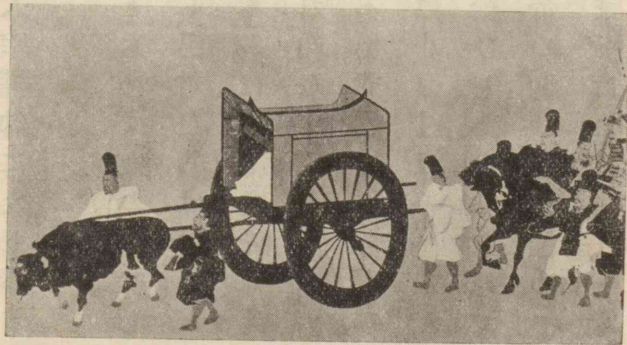
ながれゆくわれは水屑になり  
はてぬ君しがらみとなりてと

どめよ

なきことによりてかく罪せられ給ふ  
を、からく思し歎きて、やがて山崎にて出  
家せしめ給ひてけり。

山崎  
今の京都府乙  
訓郡山崎村

都遠くなるまゝに、あはれに心細く思  
されて、



菅公都を出で給ふ

明石  
今の兵庫縣明  
石市

君がすむ宿の梢をゆくくとかくるゝまでもかへ  
りみしはや

また播磨國におはしまし着きて、明石のうまやといふ所に御  
宿りせしめ給ひて、うまやのをさのいみじう思へる氣色を御覽  
じて、つくらせ給へる詩いとかなし。

驛長無驚時變改スルヲ一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さる  
る夕べ、をちかたのところへ、煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそ

燃えはじめけれ

また雲の浮きてたゞよふを御覽じて、

山わかれ飛びゆく雲のかへりくるかげ見る時ぞな  
ほ頼まるゝ

さりとも、世を思し召されけるなるべし。月のあかき夜、  
海ならずたゝへる水の底までもきよきこゝろは月  
ぞ照らさん

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給  
はめとこそはあめれ。

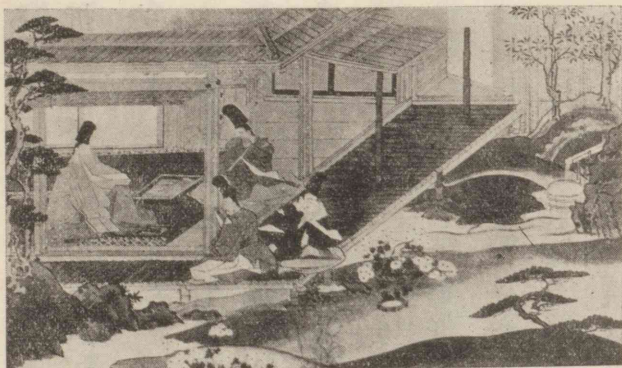
筑紫におはします所の御門も、かためておはします。大貳の居  
所は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやら  
れけるに、またいと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の聲を  
聞き召してつくらせ給へる詩ぞかし。

都府樓纒看瓦色。観音寺只聽鐘聲。

これは「文集の白居易の遺愛寺、鐘欵枕聽、香爐峰雪撥簾看」とい  
ふ詩にもまささまにつくらしめ給へり。」とこそ、昔の博士どもは  
申しけれ。

大貳  
太宰大貳藤原  
興範

文集  
「白氏文集」を  
いふ



またかの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、ま

だ京におはしましたし時、九月の今宵、内  
裏にて菊の宴ありしに、このおとどの  
つくらせ給へりける詩を、帝かしこく  
恩  
感じ給ひて、御衣賜はせ給へりしを、筑  
賜  
紫にもて下らしめ給へりければ、御覽  
の  
ずるに、いとどその折思し召し出でて、  
御  
つくらせ給ひける、  
衣

去年、今夜侍、清涼。  
秋思、詩篇獨斷、賜。  
恩賜、御衣今在此。  
捧持、毎日拜、餘香。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。このことども、たゞち

りぢりなるにもあらず、かの筑紫にてつくり集めさせ給へりけるを、書きてひと巻とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。また折々の歌を書きおかせ給へりける、おのづから世に散り聞えしなり。

また雨の降る日うちながめ給ひて、

あめの下かわけるほどのなればや着てしぬれぎ

ぬひるよしもなき

やがてかしこにて失せさせ給へり。

夜のうちにこの北野にそこの松をおほさしめ給ひて、わたしすみ給ふをこそは、たゞ今の北野の宮と申して、あら人神におはしますめれば、おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこくあがめ奉り給ふめり。筑紫のおはしましし所は安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせ給ひて、いとやんごとなし。(天鏡)

北野 今、京都市上京區  
北野の宮 今の官幣中社  
北野神社 今、安樂寺  
安樂寺 今は寺號を廢して、太宰府幣中社と號し、太宰府町にある。

團伊能

西洋美術史研究家、東京帝國大學助教授、福岡縣の生、明治二十五年。  
アクロポリス ギリシヤのアテネ市外にある。  
アティカ アテネ地方の別稱。

ピレウス アテネの西南サラミス灣に臨む港。

一四 アテネの夕日

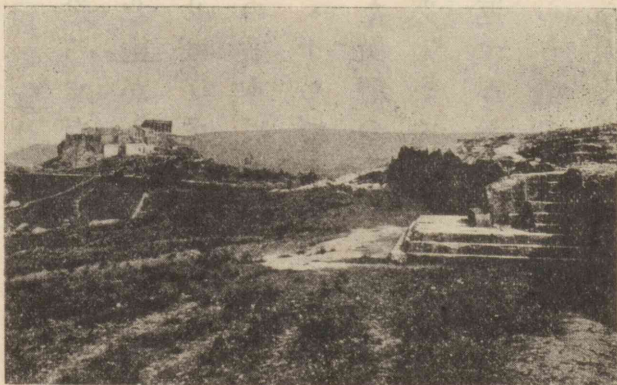
團 伊能

今日もアクロポリスの丘に夕日を送る。まだ忍冬オシカヅラの花咲く春に遠い二月の半ば、雲は低く空を閉し、北山から吹きおろす風は、神殿の石柱の肌を空しく搏つ。見おろせば、アティカの平野は霜枯れて色もなく、白い街道に沿ふ絲杉の並木ばかり、喪服を着けた女のやうに憂鬱な暗綠色をしてたゞずんでゐる。農家の屋根から流れる煖爐の煙は、葉を吹拂はれた橄欖の茂みを縫ひながら、薄青く山並の裾を匍ひ、西に廣がるサラミスの海は、鉛色の水面に、冬の雲間を落ちる夕日を淡く照返すかと思ふ間に、それもまた力なく消えてしまふ。外國船であらう、檣の高い船が二三艘沖がかりをしてゐるピレウスの港から、太く長い汽笛の音が流れて来て、人の心に旅愁を誘へば、時を知らぬ鳥が二三羽、迷ひな

イリソス  
アテネを流れる川  
デモステネス  
古代アテネの雄辯家、西暦前三三二年歿

がら頭の上を過ぎて行つた。ちやうど一塊の朽葉のやうに折りかさなつた瓦屋根をもつ丘の麓のアテネの町は、その曲折した小道に往きかふ人の影も少く、やがて夜となれば、星もない空の下に、年月馴れて來た沈黙の眠に入らうと待つてゐる。

あゝ何年、私はこの都にたづね來る日を想像してゐたであらう。星のさゝやくイリソスの小川、橄欖の影深い學園の庭、或はデモステネスの像をもつ市場の賑はひ、圓盤は音さわやかに空に飛ぶ競技場、まだ見ぬアテネの町の姿は、いつか自



望遠のスリポロクア

プリンディン  
イタリーのアフリヤ半島の東岸にある港  
コルフ  
ギリシヤの西端にある小島

バルセノン  
アクロポリス丘上にあるアテネの神を祀る神殿



分の心に己れの住む町のやうに親しいものとなつてゐた。

ちやうど二週間ほど前、バルカンの港を通ふ汽船の上に身を預け、南イタリーのプリンディンからコルフの島を過ぎ、歴史の海を渡つて、始めてギリシヤの島山を望み見た時、私の心はどんなに躍つたであらう。波なきサラミスを横切りながら港に近づくその船から、アティカの平野に兀焉として聳え立つアクロポリスの丘の上、壊れかけた破風を、數本の石柱に支へて残るバルセノンの神殿を、私はいかに深い感佩をもつ

海上同盟

古代ギリシヤの  
が、ベルシヤの  
襲撃に備へる  
ため、沿岸諸  
市と結んだ同  
盟。

テセウス

ギリシヤ神話  
中の英雄

ディピロン

アテネの西北  
隅。

て望み見たであらうか。小脇に抱へた小さい旅の荷と共に飛乗  
つた舩の上でさへ、尊いギリシヤの土をこの足に踏むその喜を  
待ちかねた。あゝしかし、私はその日から、何といふ深い失望を味  
ははなければならなかつたか。冬には用もない海水浴場と、近世  
風のコーヒー店が並んだ貧しい海岸の町、それが海上同盟の誇  
を謳つたピレウスの港の今日に映る景色であつた。私は疲れる  
こともなく、アテネの町を日ごとにさまよつた。アクロポリスの  
丘、テセウスの神殿、ディピロンの墓場、それから名も知らぬ町や  
丘や野や河畔に、失はれたギリシヤの國を探して歩いた。氣高い  
神殿は、いつその姿をかくしたであらう。裸身の神々は、いづこの  
空に去つたのか。そして私が見出したのは、枯草に蔽はれた礎  
や、碎け落ちた柱頭の花飾や、また博物館の内に閉ぢこめられ、手  
を失ひ、足を折り、時に頸さへ残らない奇異な石彫の破片ばかり

アテナ

ギリシヤ神話  
に見える女神  
ゼウスの女で、  
アテネの守護  
神である。

であつた。

その昔アテネの市民は船型の花車を曳きながら、祭司や長老  
をはじめとして、男は酒壺を擔ひ、女は花を翳し、武人は騎馬の蹄  
勇ましく岩地を踏ん  
で、アテナの神の神殿  
に集まつた祭の有様  
を思ふよしもなく、ア  
クロポリスの丘には、  
その破風ばかり寂し  
く残るパルセノンや、屋根は崩れ落ちた勝利神ニケの宮、或は美  
しい女の姿を柱とした數本の人像柱を残すアテネの建國の王  
エレクテイウスの神殿を繞つて散亂する石の破片に、夏は雲雀  
が巢くひ、冬は枯草に寒風が泣くのを聞くばかりである。



アテナの神像

ペリクレス 古代ギリシャの大政治家、アテナの執政つて、ギリシャの黄金時代を現出せしめた。西暦前四二九年歿。  
 フィデアス アテナの彫刻家。西暦前四三一年頃歿。  
 ペンテリコン アテカカの北方にある山。  
 ドリアス 古代ギリシャの建築様式の一。  
 ポセイドン ギリシヤ神話に見えたる神で、槍を持つた老人の姿に造つてある。

ペリクレスは名工フィデアスをして、ペンテリコンの山に白  
 哲の大理石を求めしめ、アクロポリスの丘に築いた諸神殿にも、  
 アテナに捧げたパルセノンは、ドリア式の豪壯な規模、均衡すぐ  
 れたその比例において、及ぶものがなかつた。フィデアスはみづ  
 から金と象牙をもつて、兜の光勇ましいアテナの神像を刻み出  
 し、空に立つその神殿の破風には、この丘の神話に残るアテナと  
 海神ポセイドンの争をその群像の構圖の中におもしろく附け  
 加へた。まだ神々の世であつた頃、ポセイドンとアテナとは、この  
 丘を得んと互に争ひ、大神ゼウスの裁きを請うた。ゼウスは二人  
 が各すぐれた力を己れの前に示すべく命じた時、ポセイドンは  
 忽ちこの岩上に海水の泉を吹出さしめれば、アテナは騒がずそ  
 の水中より美しき橄欖の一本を生えしめ、ゼウスは終にここを  
 アテナの神に與へたといふ。この美しき物語を思ひ出して、振仰

ソクラテス 古代ギリシャの大哲學者。西暦前四二七年、年三十九の時に、神々の信を信ぜずる青年を信ずる神々の信を信ずるものとして、毒殺せられた。

ぐ柱の上には、残れる神像の影もなく、傾き立つたその破風は、フ  
 イデアスの非運を歎き、己れの變る姿を恥づるかのやうに夕日  
 の中にためらつてゐる。  
 知見にすぐれたアテナ人は、早く人文の扉を開き、ギリシヤの  
 覇權を握りながら、理念と節操を缺いたその市民は、己れの功利  
 のために人を陥れて顧みず、神の如きソクラテスに毒を盛つた  
 ばかりでなく、天才フィデアスも、ペリクレスを羨む人々の讒訴  
 に遇ひ、終にこの都を見捨てて去らなければならなかつた。人々  
 は彼が造つたアテナの像に國家が與へた金塊を私したと訴へ  
 彼はこの神像よりその金を取外し、その重量を示して一旦己れ  
 を明らかにしたが、更にこのアテナの神の楯に、彼が己れとペリ  
 クレスの肖像を神の姿の間に加へたといつて、誹謗し、彼を捕へ  
 て牢獄に下した。

テミストクレ

古代ギリシャの將軍、政治家、海軍を擴張し、奇策を張つてペルシヤの海軍を破つた。西暦前四六〇年頃歿す。

マケドニア  
ギリシヤの北境に起つた國

アレキサンダ

マケドニア王フィリップの子、世界征服の雄圖を抱いて印度まで遠征した。西暦前三三三年歿す。

テミストクレスの奇しき海の勝利によつてもたらされたアテネの隆盛も、思へば短い間であつた。西暦紀元前四百二十九年、圖らずもピレウスの港にアフリカより傳へられた黒死病は、ペリクレスを奪つたばかりでなく、アテネの市民の半ばは犠牲とし、その威信漸く傾けば、スパルタ軍は五度この町を圍み、やがてその將軍リザンドルに城門を開いて降るが如き屈辱に陥つた。デモステネスの愛國の熱辯をもつて連邦を説いても、マケドニアの武力に抗し難く、幾度か呼返さんとする昔の隆盛は、ますます失敗を重ねて、終にアテネの名譽はアレキサンダーの手中に落ち、はてはローマに貢するに至つた。藝文の華は一たびここに咲出でて、その胚子を世界に吹送り、イタリーの野に、アフリカの岸邊に豊麗の果を結んだ時、この老幹には再び花をつける日は來なかつた。バルセノンの神殿さへ、東ローマの治政の下にあつ

オスマントル

十四世紀から十七世紀に亘つて、オスマン朝の全盛時代。トルコ帝國

ては、十字を揚げるキリスト教寺院に改められ、オスマントルコの所領となれば、落日に祈る回教僧の祈の聲のみその尖頭から頂から聞えた。千六百八十七年、たまたまトルコとベニスの戦端に當り、火藥の庫としたこの神殿は、ベニスの海軍の砲撃によつて爆發し、崩れながらに残つた昔の姿も終を告げたのである。十九世紀の初、イギリス大使エルギン卿は、この丘にこぼれた石彫を拾ひ集めてロンドンに送り、大英博物館に納めて人に示すまで、バルセノンもフィデアスも、たゞ人類の忘却の中に眠つてゐたのであつた。

暮れそめてゆくアテイカの平野。その瘠せた土、その枯れた樹、その朽ちた甍には希望の色もなく、光榮の日から過ごして來た長き忍従と屈辱の歴史をのみ私の胸にさゝやく。詩人バイロンは劍を執つて戦陣に斃れ、名譽の獨立は古きギリシヤに蘇つて

バイロン  
十八世紀後半から十九世紀初頭にかけてのイギリスの詩人、西暦一八二四年歿す。



〔禁轉載〕

岩城準太郎  
國文學者、奈良女子高等師範學校教授、富山縣の人、明治十一年生。

も、あゝ、その昔の日は返つて來るであらうか。アクロポリスの冬の落日、朽ちるが如く、聲もなく、靜かに去りゆくアティカの夕日、何といふ寥寂の色であらう。神殿の廢墟に薄れゆくその淡い光を私は兩手に捕へようとして、石柱を抱いた。

一五 國學者の業績

岩城準太郎

「獨り燈火の下に書をひろげて、見ぬ世の人を友とすることこそ、こよなう慰むわざなれ」とは、「徒然草」の名文句であるが、人間と人間とが相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、言語・文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相通ずるを得るのは、即ち「ふみ」のおかげである。國と國と相知り、國民と國民とが相理解するのは、外交と貿易とによるのみでない。相互に他の文章を讀むことによる。矯飾と

辭令とを剝去つた赤裸の國民は、その創作するところの文學に最もよく活躍するからである。

一國の國民が、その祖先と相面接する思をするのは、過去の國民の書殘した文學を讀む時である。父祖の遺文に接する時の懐かしさはいふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉・室町時代の國民、平安時代の國民、更に溯つて上古・太古の國民の、その時代々々に創作した文學を繙く時こそ、本當に我が血脈の生々相繋がる宿縁を直感するのである。

古代國民の面影を髣髴しようとするには、直接古代國民の創作したものに當らねばならぬ。その思想を知り、その感情を解し、その生活に直面しようとするには、一意その遺作・遺文を味讀するに限る。我が國民の固有せる生活の眞相を、生き／＼と今日の我等に見せてくれるのは、即ち古典である、古文學である。

歲月の久しきに随つて遺作遺文が亡びる。時代の古きに随つて文筆の人が少い。歴史あつて以來三千年、上世に溯れば溯るほど、典籍が稀になるのである。この稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切なフィルムである。これを書残した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選り上げられた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歳の淘汰を経て今日に傳はつた古典は、眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

かう見て來ると、古典の研究は、たゞに古物いぢりの物好きでもないのみならず、學問のための學問といふやうなものでもない。實に我等の衷心の要求からやむにやまれぬ感情の問題である。如上の意味において、自分は古典に對して限りない愛敬を捧げ、探究

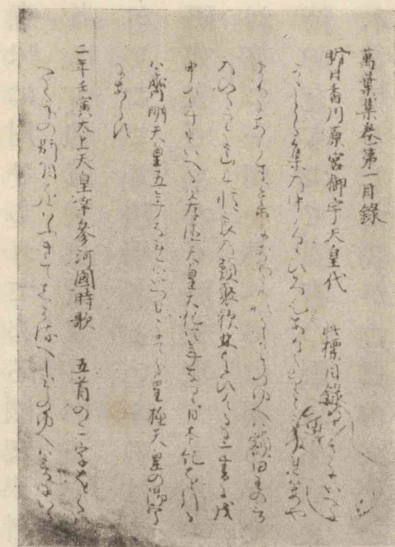
の念を起すのである。この點に着目し、かくの如き見解から、古典の研究を開始したものは、即ち我が國學者である。

國學者といふ名は可なり廣い意味に用ひられ、随つて曖昧な意味に用ひられてゐる。國文學者、國語學者にも、國史學者、古典學者にも、神道家、皇道家といふやうな方面にも用ひられてゐる。しかしここで國學者といふのは、國文學の創作家でもなく、國語の研究家でもなく、歴史家でもなく、また神道家でもない。すべてこれ等の一面を具へてはゐるが、その本領とするところは、國民的精神をもつて、固有の國民生活を闡明しようとするので、その根本資料として我が古典、古文學を研究する人々である。即ち古典を通じて國民を見ようと努める學者である。

國學といふ言葉は、古く平安朝の文書「菅家遺誠」などに見えてゐるけれども、それは意味が違ふ。上述の意味の學風は、對外的に

「菅家遺誠」  
人倫の教誡三  
十條ばかりを  
示したもので、  
菅原道眞の著  
るといはれてゐる。

國民としての自覺が生じた後でなければ起らぬ。佛學あり、漢學あり、ここに國學が起るので、漢學が漢土の道を講じ、佛學が佛敎の道理を説くので、ここに我が國の古道を闡明しようといふ要求が起る。神道の興起は、この



萬葉代記の草稿(沖製筆)

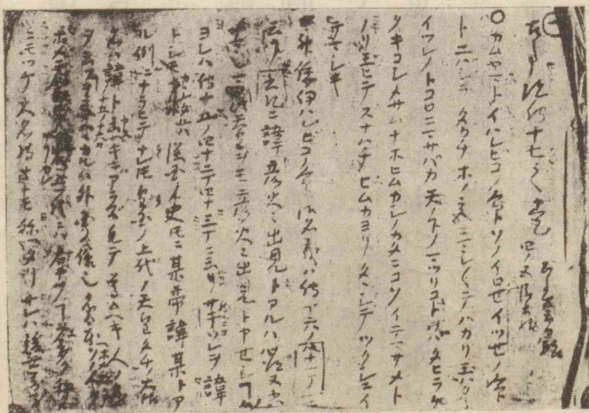
要求と關係はあるが、近古時代の神道は、研究の方法を誤り、頭腦の向け方を知らなかつたから、まだ國學といふ特色的なものにはならなかつた。やつぱり學術的研究の實力が出来て来るのを待たねばならなかつた。

近世江戸時代になつて、學問が始めてその體裁をなして來た。漢學にも、佛學にも、學者と名づくべき者が出て來た。特に漢學の

慶長  
第百七代後陽成天皇の御代

荷田春滿  
本姓は羽倉、元文元年歿。  
伏見稻荷  
今、京都市伏見區深草町に鎮座する官幣大社。  
享保  
第百十四代中御門天皇の御代、徳川八代將軍吉宗の世

勢が盛んであつた。慶長年間、漢學興隆の施設をなしてから約百年、これに刺激せられて國學も始めて現れた。國學者なるものが出たのはそれからである。國學の言葉を新しい意味に用ひたのは、荷田春滿だといはれてゐる。春滿は伏見稻荷の神官であつて、享保十三年、京都東山に學校を創立することを、幕府に建議した。その啓文に始めて國學の語を用ひたのである。なほ啓文の中に皇國之學ともいひ、國家之學ともいつて、すべて同じ意義に用ひてあるが、學校の名を國學校と出してあるのを見る



古事記の草稿(宣長筆)

啓の年  
文

萬治 第百十一代後  
徳川四代將軍  
家綱の世  
寛文 第百十二代  
元天皇の御代  
世 同く家綱の

と、國學といふ方が春滿の主として用ひようとした言葉と認め  
てよろしい。

この意味での國學者は、萬治寛文頃から追々現れて、近く明治  
時代に及んでゐる。僧契沖、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤  
等は、その最も傑出した人物である。

これ等の人々の忠實熱心な研究によつて、從來暗がりの中に  
放置せられてゐた古典が漸次に究明せられ、我が懐かしい同胞  
國民の面影をまのあたり見るが如く感ずることが出来るやう  
になつた。今までは、せつかくあの貴重な古典をもつてゐながら、  
言語解釋の困難であるがために、祖先の心胸に觸れることが出  
來なかつたが、これ等學者は、まづ言語を討究し、傳説を説明し、歌  
謠を解釋し、史籍物語等古典の全部にわたつて啓蒙的研鑽に力  
めたので、我等後生がどのくらゐその餘澤に浴してゐるか計ら

れない。我等は國學者の開いてくれた道に立つて、遠い祖先への  
面接に急ぐ時、しみじみ有難さを感じて、その功業を讚美しない  
ではゐられない。

(國文學の諸相)

一六 をりふしのうつりかはり 吉田兼好

をりふしのうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ。もの  
あはれは秋こそまされ。と人ごとにいふめれど、それもさるもの  
にて、今一きは心もうきたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の  
聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出  
づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう／＼氣色立つほ  
どこそあれ、をりしも雨風うち續きて心あわたしく散過ぎぬ。  
青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。花橋は名  
にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古へのこともたちかへり、こひし

吉田兼好 俗姓名は卜部  
兼好、吉野朝  
時代の歌僧、平  
京都の人、正  
平五年歿。正  
ものあはれ  
は云々  
「春はたい花  
のひとへに咲  
くばかりもの  
のあはれは秋  
ぞまされる」  
(詠人不知、拾  
遺集)

五月まつ  
花橋の香とのやは  
青の人の油の香

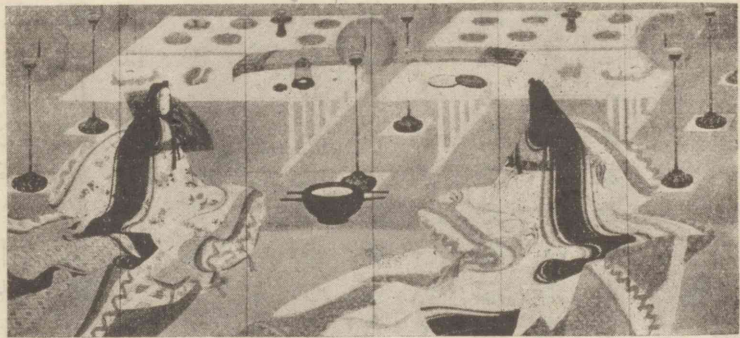
一六をりふしのうつりかはり

在原業平

世の中にたえて櫻の  
なまじりかは春のほと  
のつけかりなり

六月  
六月晦日に諸社にて行はれる神事

六月  
六月晦日に諸社にて行はれる神事

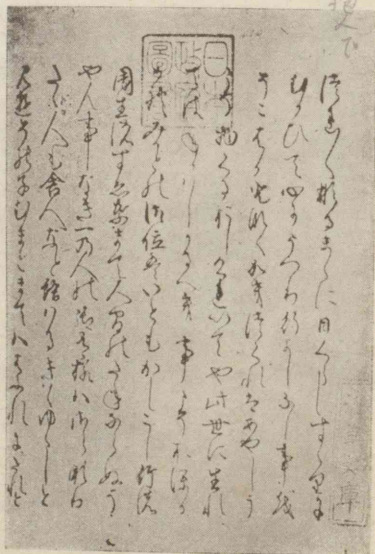


(筆泉天生菘)

七  
う思ひ出でらるゝ山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。  
「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人のこひしさもまされ」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめ葺く頃、早苗とる頃、水鶏のたゞくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。  
七夕祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて来る頃、萩の

夜寒  
夜寒は夏の夕暮れに  
夕暮れを憂ふ夕暮れ

下葉色づくほど、わさ田刈干すなど、取集めたることは、秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。いひ續くれば、皆源氏物語「枕草子」などにことぶりにたれど、同じことまた今更にいはず。じにもあらず。思しきことといはぬは腹ふくるハワガミ。さなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。



「草然徒」本 峨 嵯

さて、冬枯の景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白うおけるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。

一六をりふしのうつりかはり

御佛名

十二月十九日  
から二十一日  
まで三日間宮  
中にて行はれ  
る佛事

荷前

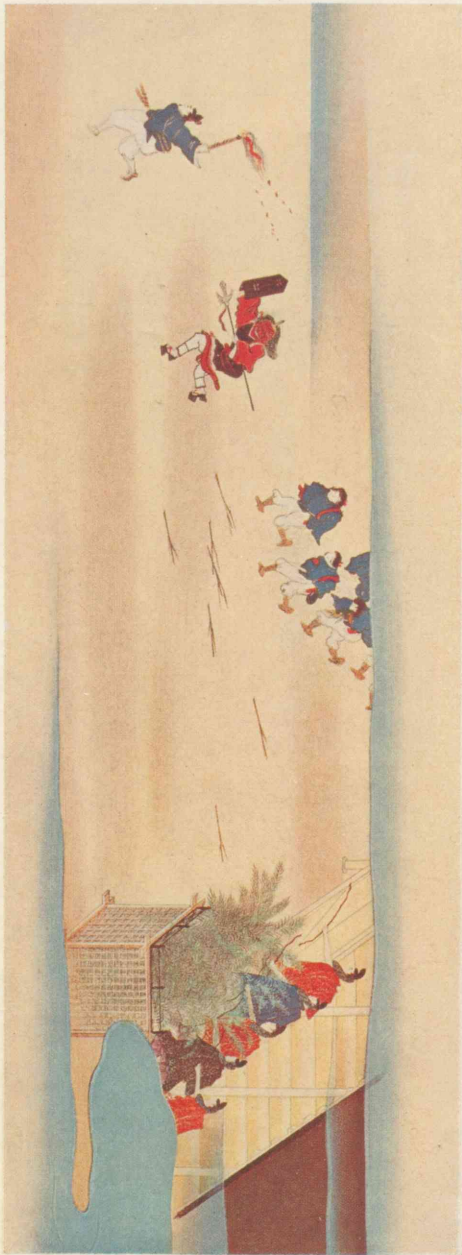
十二月の吉日  
を選んで、朝  
廷から十陵八  
墓に幣帛を奉  
ること

魂祭る

古へは七月十  
日と十二月晦  
日と年に二回  
魂祭を行つた

年の暮れはてて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ、またなくあはれ  
なる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二  
十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名荷前の使立つなどぞ、  
あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて  
催し行はるゝさまぞいみじきや。

追儼より四方拜に續くこそおもしろけれ。晦の夜いたう暗き  
に、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たゝき走りありきて、  
何事にかあらん、ことしくのゝしりて、足を空に惑ふが曉方  
よりさすがに、音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人  
の來る夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方に  
はなほすることにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆ  
く空の氣色、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地  
ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ



魂祭

廣島縣 佐伯郡 十日市町

廣島縣 佐伯郡 廿日市町

清水が舞う

清水が舞う

またあはれなれ。

(徒然草)

一七 古今調と新古今調

〔古今集〕より

紀貫之

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立つけふの風やとくらん

紀友則

久方の光のどけき春の日にしづこゝろなく花の散るらん

僧正遍照

蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

紀友則  
平安時代初期  
の朝臣、歌人、  
延喜五年歿

僧正遍照  
俗姓名は良岑  
宗貞、平安時  
代初期の歌僧、  
寛平二年歿

住の江  
今の大坂市住  
吉區の邊の古  
稱

住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖つしら  
なみ

壬生忠岑

平安時代初期  
の朝臣、歌人、  
康保二年歿

壬生忠岑

山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさま  
しづな

詠人不知

大空の月のひかりし清ければ影見し水ぞまづ氷りけ  
る

小野千古の母

小野千古  
平安時代初期  
の國司、陸奥  
介

たらちねの親の守と相添ふる心ばかりはせきなと  
めそ

小野篁

小野篁  
平安時代初期  
の朝臣、學者、  
歌人、仁壽二  
年歿

惟喬親王

文徳天皇の第  
一皇子、出家  
して小野の庵  
に幽棲され  
た。寛平九年  
薨

わたの原八十鳥かけて漕ぎいでぬと人には告げよ蟹  
の釣舟

惟喬親王

白雲の絶えずたなびく嶺にだに住めばすみぬる世に  
こそありけれ

〔新古今集〕より

式子内親王

式子内親王  
後白河天皇の  
皇女、歌人

山深み春とも知らぬ松の戸にたえくかゝる雪の玉

藤原俊成

藤原俊成  
鎌倉時代初期  
の朝臣、歌人、  
定家の父、元  
久元年歿

水

またや見ん交野のみ野の櫻がり花の雪散る春のあけ

藤原忠良

交野  
今の大坂府北  
河内郡の野

藤原忠良  
鎌倉時代初期  
の朝臣、歌人、  
嘉祿元年歿



藤原定家  
鎌倉時代初期  
の朝臣、歌人、  
仁治二年歿。

楞咲く外面の木かげ露落ちてさみだれ晴る、風わた  
るなり  
藤原定家

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋のゆ  
ふぐれ  
藤原良經

藤原良經  
鎌倉時代初期  
の朝臣、歌人、  
建永元年歿。

雲はみな拂ひはてたるあきかぜを松に残して月を見  
るかな  
寂蓮法師

寂蓮法師

俗姓名は藤原  
定長、鎌倉時  
代初期の歌人、  
建仁二年歿。

たえ／＼に里わく月の光かな時雨を送る夜半のむら  
雲  
藤原家隆

藤原家隆

鎌倉時代初期  
の朝臣、歌人、  
定家と並び稱  
せられた。嘉  
禎三年歿。

明けばまた越ゆべき山の峰なれや空行く月の末の白

雲

藤原雅經

鎌倉時代初期  
の朝臣、歌人、  
承久三年歿。

影宿す露のみ茂くなりはてて草にやつる、ふるさとの  
月  
藤原雅經

西行法師

風に靡く富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我が思  
かな  
大僧正慈圓

大僧正慈圓

鎌倉時代初期  
の天台宗の僧、  
延暦寺の座主、  
嘉祿元年歿。

有明の月の行方をながめてぞ野寺の鐘は聞くべかり  
ける  
大僧正慈圓

一八 東下り

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京には

八橋  
今の愛知縣知  
立町の東

あらし、東の方に住むべき國もとめんとて行きけり。もとより友  
とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行き  
けり。

三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水  
ゆく河のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とは  
いへる。その澤のほとりの木の蔭におりゐて、餉かたくひけり。その澤  
にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て或人のいは  
く、「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め」と  
いひければ、詠める、

唐衣きつゝ、馴れにしつましあればはるく、來ぬる  
旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人、餉の上に涙落して、ほとびにけり。

行きく、て駿河國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、我が入ら

宇津の山  
今、靜岡縣安  
倍郡にある。



宇津の山  
京にその人の御許にとて、文か  
ば見し人なりけり。  
駿河なるうつの山邊のう  
つゝにもゆめにも人に逢  
はぬなりけり

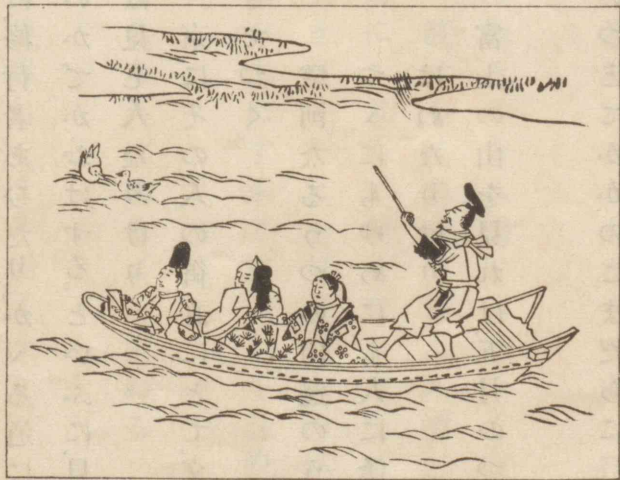
富士の山を見れば、五月のつご

もりに、雪いと白う降り。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてかかのこまだらに  
雪の降るらん

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは鹽尻のやうになんありける。

なほ行きくゞて武藏國と下總國とのなかにいと大きな川あり。それを隅田川といふ。その川のほとりにむれるて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ。日も暮れなん」といふに、乗りて渡らんとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鴨の



隅田川の渡

大ききなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人え知らず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥」といふを聞き

て、  
名にしおはばいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

(伊勢物語)

一九 隅田川

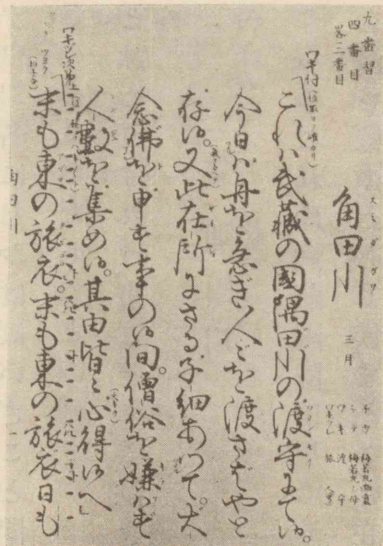
ワキ詞「これは武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ、人々を渡さばやと存じ候。またこの在所にさる仔細あつて、大念佛を申すことの候間、僧俗を嫌はず、人數を集め候。その由皆々心得候へ。」

ツレ次第論「末も東の旅衣、日も遙々の心かな。詞かやうに候もの

ツレ  
旅人。

ワキ  
渡守。

は、都のものにて候。我、東に知る人の候ほどに、かのものを尋ねて、たゞ今罷り下り候。道行雲霞あと遠山に越えなして、幾關々の道すがら、國々過ぎて行くほどに、ここぞ名に負ふ隅田川、渡りに早



く着きにけり。詞急ぎ候ほどに、これははや隅田川の渡りに候。またあれを見れば、舟が出て候。急ぎ乗らばやと存じ候。いかに船頭殿、舟に乗らうずるにて候。ワキ詞、なか

まづ御出で候あとの、けしからず物騒に候は、何事にて候ぞ。ッレ詞「さん候、都より女物狂の下り候が、是非もなくおもしろう狂ひ候を見候よ。ワキ詞、さやうに候はば、暫く舟をとめて、かの物狂を



川田隅

シテ  
狂女。梅若丸  
の母。

聞くやいかに  
云々

「聞くやいか  
にうはの空な  
る風だにも松  
に音する習あ  
りとは(宮内  
卿新古今集)

北白河  
今の京都府愛  
宕郡白河村。

四鳥の別れ  
鳥の子四羽が  
各巣立つて別  
れようとす  
るのを、母鳥が  
送つて悲鳴し  
たといふ故事  
「孔子家語」に  
見える。

待たうずるにて候。

シテサシ一聲謠げにや、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の道行き人に言づつて、行方を何と尋ぬらん。聞くやいかに、うはの空なる風だにも、地謠松に音する習あり。シテ謠眞葛が原の露の世に、地謠身を恨みてや明け暮れん。シテ謠これは都北白河に、年経て住める女なるが、思はざる外に一人子を、ひとみま商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の跡を尋ねて迷ふなり。下歌地謠千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを。上歌もとよりも、契假なる一つ世の、そのうちをだに添ひもせて、ここやかしに親と子の、四鳥の別れこれなれや。尋ぬる心のはてやらん、武藏國と下總の中にある、隅田川にも着きにけり。

シテ詞「なうく」我をも舟に乗せて給はり候へ。ワキ詞おことは  
 いづくよりいづ方へ下る人ぞ。シテ詞これは都より人を尋ねて  
 下るものにて候。ワキ詞都の人といひ、狂人といひ、おもしろう狂  
 うて見せ候へ。狂はずば、  
 この舟には乗せまじい  
 ぞとよ。シテ詞うたてや  
 な、隅田川の渡守ならば、  
 日も暮れぬ、舟に乗れと  
 こそ承るべけれ。諸か  
 たの如くも都のものを、  
 舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも覚えぬことな宣ひそよ。  
ワキ詞げにく、都の人とて、名にし負ひたる優しさよ。シテ詞な  
 う、その詞はこなたにも耳に留るものを。かの業平もこの渡りに



女 狂

舟ぎほふ云々  
 堀江の川のみ  
 堀江の川のみ  
 つなぎは來る  
 鳥かも(大伴  
 家持、萬葉集)

て、諸名にしおはばいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありや  
 なしやと。詞なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見  
 馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ詞あれこそ沖の鷗候  
 よ。シテ詞うたてやな、浦にては千鳥ともいへ、鷗ともいへ、などこ  
 の隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワキ詞げにく、  
 誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、  
シテ詞沖の鷗と夕波の、ワキ詞昔にかへる業平も、シテ詞ありや  
 なしやとこと問ひしも、ワキ詞都の人を思ひ妻、シテ詞わらはも  
 東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の、ワキ詞妻をしのび、シテ詞  
子を尋ぬるも、ワキ詞思は同じ、シテ詞こひ路なれば、上歌地詞我も  
 また、いざこと問はん都鳥、我が思ひ子は東路に、ありやなしやと  
 問へども、答へぬは、うたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。げにや、舟  
 ぎほふ堀江の川の水際に、來るつゝ、鳴くは都鳥、それは難波江こ

れはまた、隅田川の東まで、思へば限りなく遠くも來ぬるものかな。さりとは渡守、舟こぞりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守。さりとは乗せてたび候へ。ワキ詞かゝる優しき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。この渡りは大事の渡りにて候。構へて靜かに召され候へ。

ツレ詞なう、あの向ひの柳のもとに、人の多く集まりて候は、何事にて候ぞ。ワキ詞さん候、あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候。この舟の向ひへ着き候はんほどに語つて聞かせ申さうずるにて候。語さても去年三月十五日、しかも今日に相當つて候。人商人の都より、年のほど十二三ばかりなる幼きものを買取つて奥へ下り候が、この幼きもの、いまだ習はぬ旅の疲にや、もつての外に違例し、今は一足もひかれずとて、この川岸にひれ伏し候を、なんほう世には情なきものの候ぞ、この幼きもの

をば、そのまゝ路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間、この邊の人々、この幼きものの姿を見候に、由ありげに見え候ほどに、さまさまにいたはりて候へども、前世の事にもや候ひけん、ただ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく、いかなる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某と申しし人のたゞ一人子にて候が、父には後れ、母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになりゆき候。都の人の足手影も懐かしう候へば、この道のほとりに築きこめて、しるしに柳を植ゑて賜はれと、おとなしやかに申し、念佛四五遍唱へ、終にこと終つて候。なんほうあはれなる物語にて候ぞ。見申せば、船中にも、少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて、御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。疾うく御上がり候へ。ツレ詞いかさま今日はこの所に逗留

仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。

ワキ詞 いかにかにこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ。急いで上がり候へ。あら優しや、今の物語を聞き候ひて、落涙し候よ。なう急いで舟より上がり候へ。シテ詞 なる舟人、今の物語はいつのことにて候ぞ。ワキ詞 去年三月、今日のことにて候。シテ詞 さてその年の年は、ワキ詞 十二歳。シテ詞 主の名は。ワキ詞 梅若丸。シテ詞 父の名字は。ワキ詞 吉田の何某。シテ詞 さてその後は、親とても尋ねず、ワキ詞 親類とても尋ね來ず、シテ詞 まして母とても尋ねぬやなう。ワキ詞 思ひも寄らぬこと。シテ詞 なる親類とても、親とても、尋ね來ぬこそことわりなれ。その幼きものこそ、この物狂が尋ぬる子にて候へとよ。なうこれは夢かや、あらあさましや候。ワキ詞 言語道斷のことにて候ものかな。今まではよそのこととこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あら痛はしや候。かの

人の墓所を見せ候べし。こなたへ御出で候へ。

シテ詞 今まではさりととも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今はこの世になき跡の、しるしばかりを見ることよ。さても無慙や、死の縁とて、生所しやうじよを去つて、東のはての道のほとりの土となつて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや。

地謠 ざりとては人々、この土をかへして、今一度この世の姿を母に見せさせ給へや。上歌 残りてもかひあるべきは空しくて、あるはかひなきは、き木の、見えつ隠れつ面影の、定めなき世の習、人間憂の花盛り、無常のあらし音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲おほへり。げに目の前のうき世かな。

ワキ詞 今は何と御歎き候ひてもかひなきこと。たゞ念佛を御申し候ひて、後世ごせを御弔ひ候へ。謠 既に月出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らしすゝむれば、



梟鐘  
鉦鼓のこと。

子方  
梅若丸の亡靈。

シテ謠母はあまりの悲しさに、念佛をさへ申さずして、たゞひれ伏して泣きゐたり。ワキ詞うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれど、諸鉦鼓を母にまゐらすれば、シテ謠我が子のためと聞けばげに、この身も梟鐘を取上げて、ワキ謠歎きをとゞめ、聲澄むや、シテ謠月の夜念佛もろ共に、ワキ詞心は西へと一すぢに、シテ、ワキ謠南無や西方極樂世界、三十六萬億同號同名阿彌陀佛。地謠南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠隅田川原の波風も、聲たて添へて、地謠南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠名にしおはば、都鳥も音を添へて、子方、地謠南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

シテ詞なうく、今の念佛のうち、まさしく我が子の聲の聞え候。この塚の内にてありげに候よ。ワキ詞我等もさやうに聞きて候。所詮こなたの念佛をばとゞめ候べし。母御一人御申し候へ。



シテ謠今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子謠南無阿彌陀

佛、南無阿彌陀佛と、地謠聲のうちよ  
り、幻に見えければ、シテ謠あれは我  
が子か。子謠母にてましますかと、  
地謠互に手に手を取りかはせば、ま  
た消えくとなりゆけば、いよく  
思はます鏡。面影もまぼろしも、見え  
つ隠れつするほどに、東雲の空もほ  
のぼのと明けゆけばあと絶えて、我  
が子と見えしは塚の上の、草茫々と  
して、たゞしるしばかりの淺茅が原  
となるこそあはれなりけれ。

(觀世流謠曲)

佐佐木信綱  
國文學者、歌  
人、文學博士、  
三重縣の人、  
明治五年生。

二〇 野村望東尼

佐佐木信綱

日本歴史上の大偉業たる明治維新の時代は、忠勇義烈な我が國民性の精髓を代表すべき幾多の義人志士を生んだ。それ等の義人志士のうちには、またもとより幾多のすぐれた妻があり、母があつた。しかしそれ等の義人志士と交はつて、婦人ながらも世の荒波と戦つて勤王の大業に盡くし、波瀾の多い生涯を送つた婦人は何人かといへば、即ちここに記さうとする野村望東尼である。否、望東尼はたゞに慷慨の節婦たるのみではない。彼女は我が國古來のすぐれた女歌人の一人である。

望東尼は初の名をもといふ。筑前福岡の人である。ロシア人が蝦夷を侵して、邊鄙を脅した文化三年に、浦野勝幸といふ人の三女として生まれた。長ずるに随つて容姿美しく、歌を好み、書道

文化  
第百十九代光  
格天皇の御代、  
徳川十一代將  
軍家齊の世。

天保  
第百二十代仁  
孝天皇の御代、  
家齊の世。

裁縫・刺繡のわざにもすぐれてゐた。同藩の士野村貞貫といふ人のもとに嫁いて後は、よくその家を治め、先妻の子をおほしたて、妻たり、母たる務をも十分に盡くした。しかもその間に、かねて好める和歌にいそしんで、天保三年、二十七歳の時、夫貞貫と共に福岡の歌人大隈言道の門に入つた。言道はその名こそ多く知られないが、その歌才において近世第一流の中に數へられるべき歌人で、その歌風は輕妙奇抜、一種の新しみがあるものであつた。望東尼がこの師に就いたのは、彼女のためにはまことに喜ぶべきこととて、彼女は十分に師の歌風の妙味を學び得て、師も深く許した。

弘化二年、四十歳の時、家督を長子に譲つて、夫と共に福岡の郊外なる平尾山の山莊に閑居した。その後、山莊に風月を楽しんだ折々の歌は、いかにも情懷の懐かしく思はれるもののみである。

弘化  
仁孝天皇の御  
代、徳川十二  
世、將軍家慶の

二〇 野村望東尼

二三を擧げると、

春きぬとつげの小櫛もとらなくに笑ふ人だになき

山邊かな

葺きかふるものとも知らでわが庵の屋根のうねう

ねおふる姫松

雨晴れて月見る夜半はやり水の音もほどよく流れ

ぬるかな

しかもこの山莊に隠れすむ彼女の心をも動かすのは時勢の

波であつた。嘉永六年、浦賀に米艦が來た時の作に、

こと國の船はうき世の浪たてていどみがほにも打

ちよせしかな

山莊に共に住むこと十五年、安政六年七月二十八日、五十四歳

の時、夫は逝つた。その時の歌に、

嘉永  
第二百一十一代  
孝明天皇の御  
代、家慶の世

安政  
孝明天皇の御  
代、徳川十四  
世、家茂の世

初秋の風に吹かるゝともし火のかげもこゝろも細  
る夜半かな

彼女は直ちに剃髪して佛門に入り、その名のもとをさながら  
とつて望東尼といつた。

彼女の夫貞貫も、夙に勤王の志のあつた人で、山莊に移り住ん  
だ後に、楠公の靈を祀つてこれに仕へるとか、「太平記」のたぐひを  
講ずるとかしてゐたが、いまだその時機に際せずして死んだの  
であつた。望東尼もかゝる人を夫として、かねて同じ勤王の志に  
燃えてゐたのであるが、夫を亡つた頃から、國事はますます繁  
なつて、彼女の心を刺激するものが多かつた。則ち、閑居に堪へず  
文久元年には和宮御降嫁のことがあつたのに際して、京都に上  
り、皇居を拜み、橿原神宮を拜して皇祖の偉業をしのんだりした。  
また湊川で楠公の墓に詣でては、

文久  
孝明天皇の御  
代、家茂の世

かしこしとぬかづくうちも我が袖のみなと川水せ  
きぞかねつる  
と詠んだ。

京阪の旅行において見聞遭遇した幾多の刺激經驗によつて、彼女の勤王の精神はますます燃立つた。そして當時の福岡藩もまた勤王・佐幕の兩派に分れて、互にその争が盛んであつた。今や望東尼の平尾山の山莊は、決して風流の一隱宅ではなかつた。彼女は盛んに當時の志士と交際し、彼等を激勵し、彼等のために山莊を貸して、或は密議所となし、宿泊所となして、隠然勤王の士の保護者たる地位をなすに至つた。かくて彼女の生涯はいろく波瀾曲折の中に入ると共に、彼女の和歌はいよく熱烈な女丈夫の作たる面目を備へて來た。

僧月照が薩摩へ下つた時も、この山莊に宿つた。平野國臣の如

月照 京都清水寺の住職、西郷隆盛の共謀者、安政五年に島津重豪の討つたが、隆盛の海軍は、隆盛の死した。平野國臣 福岡藩の志士、福岡藩の志士、元深學の志士、で元治元年た京都、斬られた。

きも、度々訪れて多くの贈答をなした。或時、國臣を宿して旅立たせた時に、國臣が、

忍びつゝ旅立ちそむる今宵とて山かげふかきやど

りをぞする

と歌つたのに和して、

ひとすぢにあかき道ゆく中やどにかしてうれしき

山のあれ庵

をしからぬ命ながかれ櫻ばな雲居に咲かん春を見

るべく

などと詠んで贈つた。また月照と共にその山莊の客であつた高杉晋作とは、殊に親しかつた。

當時福岡の藩論は、佐幕派が優勢であつたので、望東尼がかくの如く勤王派のために盡くす態度は、大いに彼等の忌むところ

高杉晋作  
長州藩の志士、  
慶應三年歿。

元治  
孝明天皇の御  
代、家茂の世。

となつて、元治元年、大獄を起して勤王黨に壓迫を加へた時、その餘波が望東尼に及んで、まづ座敷牢に幽閉の身となり、續いて彼女は玄海灘の孤島、姫島に島流しの身となつた。時に彼女は既に六十の高齡であつた。在ること二年、かの高杉晋作のために救はれることを得たが、この二年間の姫島幽閉は、實に彼女の一生の最後の光輝ある一幕で、その苦しい牢獄すまひの間に、彼女の一生の作中のすぐれた歌の多くは作られたのである。當時の日記を「姫島日記」といつて、三部一巻をなしてゐる。歌文の筆端は、いづこにも血涙の跡をとめてをらぬのではない。

姫島といへば、陸路を去る五里の沖中にある一小島である。牢獄は四疊の荒板敷で、まはりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海に見える南の方にのみ小さな窓をあけてあるのである。いまだ流島されず、座敷牢に入れられてゐた時から、いよ／＼姫島

に幽閉され、脱獄の時に至るまでの多くの作のうち、數首を左に抜き出してみる。

浮雲のかゝるもよしやものふの大和心の數に入りなば

一たびは野分の風のはらはずば清くはならじ秋のおほぞら

以上はまだ座敷牢についた時の作である。

住みそむるひとやの枕うちつけにさけぶばかりの

波の音かな

ともし火のあるにほこりて家にてはうとくも過ぎ

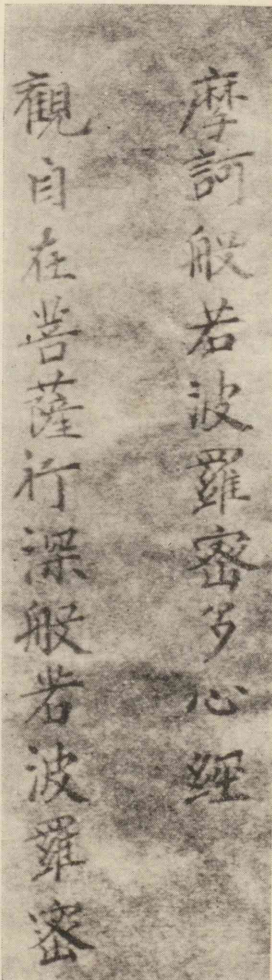
し冬の夜の月

流れこしうき身忘れてむかへてんいづこも御代の

春ぞと思へば

彼女はこの幽閉中、同志の志士の處刑せられた報を聞き、悲しみのあまり般若心經を血書して、その遺族に贈つた。その奥に記した歌に、

おくれゐてかくもかひなし法の文よみがへり來ん  
つてならなくに



「經心若般」筆尼東望

かくて高杉のために救はれて馬關に遁れたが、間もなく晋作その人は病をえて歿した。望東尼は日夜看病に努めて、痛惜をもつてこの同志の親友と永訣した。その後の彼女は、山口に移つて

同志の間に尊敬せられ、比較的安穩の生涯に入り、薩長の聯合の軍が討幕に上るめだたい門出を祝つた。それから間もなく病をえて病床に横たはつた。長州侯からは懇に取扱はれ、同志の士からは熱心に看護せられたが、終に起たず、六十二歳を期として、この女丈夫の玉の緒は絶えた。吉田松陰の妹小田村氏の夫人も山口から來て、彼女の最後の病床にあつた。時に慶應三年十一月六日、明治維新の大業のまさに成らうとする時であつた。彼女の辭世にいはいはく、

花浦の松の葉白くおく霜のきゆるもあはれ一さかりかな

この美しい一首の調べは、この女丈夫も、その末期には、むしろ優しい女歌人たる彼女にかへつた事を語つてゐると思はれる。彼女の功績は、歿後大いに認められるところとなり、明治の初

年に至つて正五位に叙せられ、靖國神社に祭られた。また遺弟によつて平尾山莊には記念碑が建てられた。彼女の志士としての偉業は、今や殆ど十分表彰され盡くしたといつて差支へがない。しかも歌人としての彼女の面目は、いまだ十分に世に知られない憾がある。これ私が特に彼女を紹介した所以である。(和歌百話)

二一 明治維新の精神

中村孝也

明治維新は國史における空前の大革新であります。この機會において國民生活は一大展開を遂げました。これを考察するのには、風俗の方面からも、經濟の方面からも、政治の方面からも、思想の方面からも、これをなすことが出來ますけれども、ここでは暫く思想、即ち精神的方面に立つて一言批判を試みたいと思ふのであります。

中村孝也  
歴史家、文學博士、東京帝國大學、東馬料縣の  
纂官、學史料纂  
八年生、明治十

明治維新の大精神の中心たるものは、創造的精神であります。しかしながら、それに對し先行的に働いたものは、復古的精神でありました。この二つの力が相合して、よく現状打破新生活展開の成績を挙げ得たのであります。故にまづ復古思想の方面を眺め、次いで創造的精神の方に移らうと思ふのであります。

復古思想は江戸時代における思想界を貫いて存する盛んな大潮流でありました。試みに儒教に就いてこれを見ますならば、朱子學派・陽明學派の如き外來の學派に對して、伊藤仁齋・荻生徂徠の古學派が起つて、宋・明を超越して直ちに孔・孟の古へに復歸しようとして致しました。國學に就いて見ますならば、これは中世・上代文學を振返つて見るものであります。神道に至りましては更に古代・外來思想の影響を受けなかつた時の國民信仰を回顧するものであります。歴史もまた主として古代史を研究したので

伊藤仁齋  
名は維楨、江戸時代中期の儒者、寶永二年歿。  
荻生徂徠  
名は雙松、江戸時代中期の儒者、享保十三年歿。

水野忠邦  
江戸時代後期  
政治家、家將  
軍に仕へて、老  
となつた。嘉  
永四年歿。

あつて、同じく復古思想の表現であります。この復古思想が政治の方面に現れて、武家の方では徳川氏の始祖たる家康を規準に立て、八代將軍吉宗はその享保の改革に當つて、萬事權現様御誕の通り」といふ言葉を套語として、直ちに慶長・元和の古へに復することを努めました。次いで寛政の松平定信は、近くしては祖父吉宗の享保時代、遠くしてはまた東照大権現の時代に復せんことを努めたのであります。降つて天保の改革者水野越前守忠邦は、近くしては寛政の定信、溯つてはせめて享保の將軍吉宗にまで復しようとなつたのであります。

○ 翻つて朝廷の側でこれを見ますと、王政復古運動の戦線に立つて、皇室中心の新しい時代を打開かうと努めたところの人々は、近く建武中興の政治を標準としたのであります。建武中興は後醍醐天皇によつて成された改革であります。その理想の標

準として仰ぎ見たのは、平安朝の盛時たる宇多・醍醐・村上の三帝の時代でありました。大覺寺統の御歴代には後宇多天皇、後醍醐天皇、後村上天皇が相繼いで立たせられてをりますので、その御追號を通してすらも平安朝の盛時にあこがれてをられたことが思はれるのであります。

然るに、その王朝の盛時の淵源は、なほ溯つて、神武天皇の建國の創業に存するのであります。ここにおいて明治維新の復古思想は、近く建武中興に止まることなく、更に平安朝の盛時を経て、溯つて遠く神武天皇建國創業の古へに復せんとするやうになりました。これ實に復古思想の最も雄大なるものであります。然るに神武天皇建國創業の時代においては、いまだキリスト教の傳來なく、また佛教の傳來なく、更に儒教の傳來すらなく、即ち一切の外國文化・外來思想の影響を蒙ることなく、喩へば生ま



れ落ちたまゝの純眞な姿でありまして、そこに最も正しい日本精神が存在したのであります。この日本精神がその後幾多の外來文化に養はれ、育てられて、複雑な生活内容をもつに至つたのであります。が、今や神武天皇建國創業の精神を發揮することを目標とするに至つたのは、要するに純粹な日本精神を發揚せんとすることに外ならないのであります。

然らば、その日本精神の中心核子たる力は何であるかと申しますと、一言にして盡くせば、それは祖神崇敬の信仰であります。祖神崇敬を分解致しますと、崇祖と敬神とになります。崇祖は祖先崇拜であり、敬神は神祇崇拜であります。我々が自己の生命を考へる時に、肉體の淵源を祖先の血統に求め、心靈の淵源を神の信仰に求めることは人類共通の現象であり、珍しいとするに足らないこととありますが、この二つが合體して、あらゆる祖先は

悉く神であり、あらゆる神は悉く祖先であるといふ信仰をもつのは、日本國民固有の事實でありまして、數千年來連綿として今日に至り、なほ且我々の胸中に澎湃として溢れ漲つてゐるところのものであります。故にこの中心觀念を振返つて見たところの明治維新の根本の力は、祖神崇敬の信仰を確立することにあつたと考へるのであります。

しかしながら、この復古思想は、明治維新の大革新の主たる部分ではなくして、實はこれを基礎として、將來に向かつて新たな生活様式を建設することの方が重要な部分を占めたのであります。いひ換へてみますと、復古思想は回顧的でありましたが、たゞ徒に過去を振返つて見る目的をもつて振返つたのではなく、實は將來に向かつて正しく進まんがためにまづ振返つて見たのであります。凡そ正しく進まんを欲するものは、まづ正しく顧みる

ことを要します。過去より現在にわたつて進んで來た大道といふものは、將來またこれによつて進むべきものであつて、ここに新たな生活様式を建設せんとする創造精神が働いて來るのであります。ここにおいて武家階級本位の生活は破壊されて、國民全體の生活を創造する力が動いて、三つの方面に現れて來ました。

第一、經濟方面では、資本の價値が自由に伸びて、資本經濟組織を完成し、從來の土地經濟組織に代ることになりました。

第二、思想の方面では、皇室中心の國民生活をもつて、最も正しく、また最も健全なものとする思想が全國民を通じて尊重せられ、永い武家時代を通じて存してをつた、皇室の外に別に幕府を中心とする不徹底な誤れる思想が打破されました。

第三、政治の方面では、内にしては皇室中心の立憲政體が確立し、外にしては國力が伸長し、領土は擴大せられ、國際的地位は高

まり、國威は全世界に發揚せられました。

かくの如くして、經濟と、思想と、政治と三方面が變化したことは、即ち社會生活の全部が變化したことになるのであります。ここにおいて前進的、躍進的の氣分が滿ち溢れて參りました。夜は明けました。朝暉は爽かに美しく東の空に昇りました。進軍喇叭の聲は嚙唳として野にも山にも勇ましく反響し、新時代は朗かに展開して參りました。

明治元年三月十四日、明治大帝は五箇條の御誓文を宣せられ給ひ、そして「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」と仰せ下されました。その御指揮に隨つて、我々日本國民は舊來の陋習を破り、天地の公道に基づき、知識を世界に求め、大いに皇基を振起し奉り、上下心を一にし、盛んに經綸を行ひました。その結果、僅かに六十餘年にして、狭かつた領土は廣くなり、少かつた人口は多

くなり、弱かつた國力は強くなり、低かつた國際的地位は高くなり、今や日輪の中天に輝く如く、日本國家の存在は、全世界の人類の仰ぎ見るところとなりました。

しかしながら、靜かに己れを顧みる時、我々が四方の門戸を開いて求め得たところの文化は、果していかなる價值を有するものでありましたらうか。我々は今日明治神宮の御前に平伏して、明治大帝の御神靈に對し奉り、及ばずながら御思召を奉じて、まさに知識を世界に求めました。と御報告申し上げることは出来ませんが、果してすべて明治維新の大精神に適するものなりや否や、この點に就いて今日深く顧みる必要があるのであります。

(日本文化史要)

日本女子讀本 卷八終

野本製

日本女子讀本 第貳版訂卷八

定價 金五拾六錢

昭和七年六月二十四日印刷  
昭和七年六月二十七日發行  
昭和八年八月二十一日訂正再版印刷  
昭和八年八月二十四日訂正再版發行



著作權所有

著者 高木武

發行者 會社 富山房

代表者 坂本嘉治馬

印刷者 川口芳太郎

東京市芝區芝浦町三丁目二番地

東京市神田區神保町一丁目三番地

發行所

會社

富

山

房

電話神田二、一七一、一七八番  
振替口座 東京五〇一、一七番





四下  
清水賀壽子

